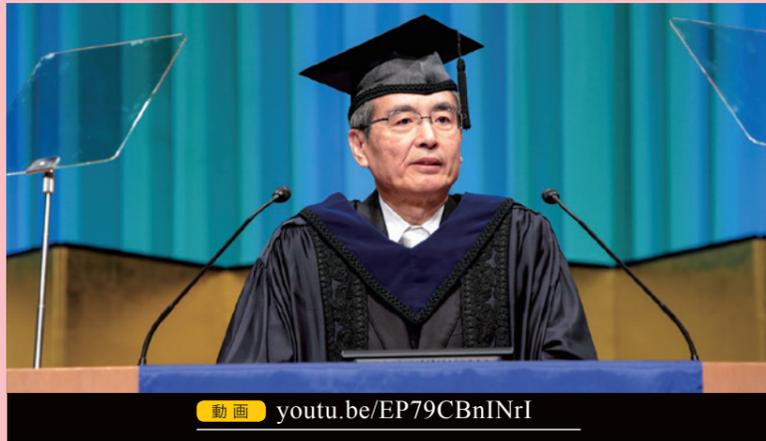


平成26年度卒業式・大学院学位記授与式——総長式辞

「多様性爆発の世紀に生きる」



阪大で学んだ誇りを胸に5,979人が巣立つ

平成26年度卒業式・大学院学位記授与式が3月25日(水)、大阪城ホールで行われ、11学部3314人、大学院16研究科2665人がそれぞれ卒業・修了しました。ホール前の広場には、開式前から出席者が集まり、写真を撮り合うなど和やかな談笑の輪が広がっていました。平野俊夫総長も学生の中に入り、一緒に記念写真を撮ったり、饒の言葉をかけるなど新しい門出を祝福しました。

式では、平野総長から各学部・研究科代表者へ学位記が、また特に優秀な学部卒業生に楠本賞が授与されました。「多様性爆発の世紀」にあって「共に生きる心こそが大事」との平野総長の式辞に続き、法学部卒業生で、医療・介護事業の経営コンサルタント会社「メディヴァ」代表取締役社長の大石佳能子さんが記念講話。大石さんは、マッキンゼー・アンド・カンパニー役員を経て自社を設立、2014年にハーバードビジネススクール・オブ・ジャパンのビジネス・ステーツウーマン・アワードを受賞したキャリア・ウーマン。30年余り前、女性が責任ある仕事に就くのが難しかった時代に阪大を卒業して社会に出てから、一步一步前向きに可能性を広げ歩んできた経歴を披露。夢を叶えるプロセスを「無人島にまちを作る」ことに例えて話をしました。まちを作るためには、マインドセット(考え方)、技、仲間の3つが必要であり、「障壁があれば発想の転換で道を拓き、あきらめないことを大切に」と後輩たちへアドバイス。



文学部を卒業した中井歩美さんは「友人や先生ら多くの人の出会いに恵まれた4年間でした。兵庫県加古川市から通い続けたのも思い出。春からは社会福祉法人で働きます」と話し、郷里の島根で教職に就くという友人の堀江玲美さんと共に笑顔を見せていました。基礎工学研究科を修了した高橋勇人さんは「学業以外でも友人との交流や旅行など思い出の多い6年を過ごすことができました。就職先では周りにつけていけるよう頑張りたい」。また、スーツ姿がほとんどの男子学生の中で、学生帽に袴という明治時代の学生風の装いで出席した文学部の鶴川祥平さんは「学生生活は、いろいろな体験ができたぜいたくな時間でした。4月からは海運会社に勤めます。へこむこともあるだろうけれど、スポンジのように吸収したい」と抱負を語っていました。

はじめに

本日、大阪大学から新たな一步を踏み出さんとされている学部卒業生の皆さん、大学院修士・博士課程修了生の皆さん、そして専門職博士課程修了生の皆さん、ご卒業、修了おめでとうございます。卒業式・学位記授与式に



あたり、これまで大阪大学で学び、努力と研鑽を積み重ねられた皆さんに対して、大阪大学総長として心からお祝いし、讃えたいと思います。

また、この日まで長きにわたって皆さんを支えてこられましたご両親、ご家族の方々に対しまして心よりお喜び申し上げますとともに、深く敬意を表したく存じます。

皆さんは本日晴れて学士や修士そして博士の学位を取得され、一人一人が、これから進むべき道に夢と希望を膨らませておられることと思います。皆さんは大阪大学で授業や研究、あるいはクラブ活動や社会活動などを通じ様々な経験を積まれました。いずれの分野に進もうとも世界中の国・地域で、大阪大学で養われた知識と能力を生かし、その分野のリーダーになって我が国の将来は勿論のこと、人類社会の発展と福祉の向上に貢献してほしいと思います。大阪大学で学ばれた皆さんには、21世紀のグローバル社会で活躍できるリーダーとしての資質と能力が備わっていることを誇りに思い、品格と責任を持って社会に進んでいただきたいと思ひます。

多様性による発展と対立の歴史

まず最初に、皆さんがこれから活躍する社会はどのような状況にあるのかに関して話をしたいと思います。今、私たちは「多様性の爆発の世紀」にいるのではないかと思います。

20万年位前にアフリカを起源としてホモ・サピエンスが誕生して以来、人類は数万年の

歳月をかけてユーラシア(アジア、ヨーロッパ)、オーストラリア、アメリカ大陸へと移動、拡散していき、この間にコイサン、コーカサド、モンゴロイド、アボリジニの4つの人種が生まれて今日に至っています。そして、1万年から数千年前にメソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明、中国文明、マヤ文明等の様々な文明が



各地に開花しました。これらの文明は地理的な関係に依存して緩やかな関係を保つこともありましたが、それぞれが独自に生まれ、周辺地域を巻き込みながらお互いが影響し合い変貌をとげていきました。その過程でユダヤ教、キリスト教、イスラム教、仏教やヒンズー教など様々な宗教が生まれるとともに、言語や文化などの多様性が生まれてきました。4つの人種はさらに細分化され様々な諸民族が今地球上には暮らしています。これらの様々な多様性を有する人類は長い歴史のなかでお互いが影響し合い、かつ対立を引き起こし、時には戦争すら引き起こしてきました。このような多様性の対立は単に従属や支配関係のみに終わることなく、時として火薬のような武器等の科学技術の発展も誘導してきました。また多様性が交わることで人類社会に様々な革新的な変革がもたらされました。さらに多様性は人類社会に心の豊かさをもたらしました。このように人類の長い歴史は多様性がもたらす発展と多様性ゆえに生じる対立や戦争の歴史であったとすることができると思ひます。

人類の歴史におけるグローバル化の波

20万年から数千年前の間に生じたホモ・サピエンスの緩やかな大陸間移動と大陸への拡散を、グローバル化の第1の波とすると、第2の波は、紀元前1万年から西暦12世紀ごろまでの1万年余りの間に生じた各地域での農耕文明の開花とその周辺への拡大です。この間に、言語、人、習慣、文明や宗教など

今日の人類社会に存在するあらゆる多様性の基本が生まれました。そして第3のグローバル化の波は13世紀から17世紀の400年間におこりました。中央アジアそして一部ヨーロッパを含むユーラシア大陸に及ぶ世界帝国を築いた広大なモンゴル帝国の出現により広域圏での陸上交通のみならず、アジアからア



リカ東海岸に至る大航海時代の幕が開きました。そして16世紀にはポルトガルやスペインなどによりユーラシア(アジア、ヨーロッパ)、アフリカ、オーストラリア、アメリカ大陸が7つの海洋で結ばれました。第4の波は、18世紀末から始まった産業革命に端を発するイギリスを中心とする植民地主義、その後のヨーロッパ諸国の帝国主義やアメリカの台頭、その結果としての2度の世界大戦と共産主義の出現や大戦後の東西冷戦構造への道筋です。この間、主役はイギリスからソ連やアメリカと変遷こそすれ、20世紀末のソ連やベルリンの壁崩壊に象徴される冷戦の終結で決着をみました。そして現代、20世紀末から始まった第5波のグローバル化、それは20世紀に花開いた相対性理論や量子力学に基づいた科学・技術の急激な発展により人類が経験したことのない地球の極端なまでの狭小化が引き起こす波です。

グローバル化の第5波

交通手段は人類の歴史のなかで、産業革命までは穏やかに発展を遂げてきました。20万年前はアフリカから北アメリカに人類が移動するのに何万年という時間がかかりました。その後人類は数千年前に馬などの動物による移動手段を獲得しました。そして船という海上移動手段を手に入れただけではなく、1世紀には中国で羅針盤が発明され海を迷うことなく航海する手段を手に入れました。また人力や動物の力から風力や水力等の自然エネルギー

を使用する手段を開発してきましたが、18世紀から19世紀にかけての蒸気機関、内燃機関、発動機や発電機の発明により、人類は自然に依存しないエネルギーを効率的に生み出すことに成功しました。それによって、現在我々が移動手段として利用している自動車、鉄道、飛行機が開発され、素早く自由に移動

することが可能になりました。例えば飛行機の普及によって、徒歩で長い時間をかけて大陸を横断していた我々人類は、今やわずか半日で大陸を横断することができます。更に開発中の超音速旅客機が実現すれば東京とニューヨーク間は3時間の距離に縮まります。人工衛星ではわずか1時間ほどで地球を1周することができます。

一方、のろしや伝書鳩などに頼っていた情報伝達も電信や無線の発明を経て、今ではインターネットにより瞬時に情報が世界中に伝わるようになりました。さらに、「モノのインターネット(Internet of Things, IoT)」の時代が始まりつつあります。世界がインターネットにより1つになろうとしています。

移動手段や情報伝達手段の発達により緩やかではあれ、確実に狭くなってきた地球は、この100年の間に過去の20万年間に生じた変化に比べて、遙か次元を超えて狭くなりつつあります。人類はその歴史のなかで幾度となく大きなグローバル化の波に襲われてきましたが、今人類が直面しているグローバル化の波は過去のそれとは全く中身が違うものです。すなわち人類の生活の基盤としている地球そのものが劇的に狭くなることを伴うものです。その意味で、人類は今まで経験したことがない性格のグローバル化の波の中に巻き込まれていると考えることができます。すなわち新人類が20万年前に誕生して以来最大の大変革期の真只中に私たちは生きているのです。

21世紀は多様性爆発の世紀

では21世紀のグローバル社会においてはなにが起こるのか、この点をよくよく考える必要があります。移動手段や情報伝達手段の発展に加えて、急激に進む人口の増加があります。永らく数億人であった世界の人口が、19世紀に10億人を突破し、その後急激に増加し、現在70億人、そして2050年には90億人を超えると推定されています。このように、移動手段や情報伝達手段のみならず、人口増加の観点からも地球は飛躍的に狭くなりつつあります。長らく比較的広大な地球に存在していた多様性は今第5のグローバル化の波のなかで、人口増加も加わり狭い時間空間に凝縮されようとしています。多様性の凝縮の問題に加えて、急激な人口の増加や技術革新は食料問題、エネルギーや環境問題、さらには感染症問題や生物多様性の危機など、様々な要因が複雑に絡んだ地球規模の深刻な問題を投げかけています。

言語、人、習慣、文化、宗教や政治形態などの多様性は革新的なイノベーションの創出や心豊かな人類社会の営みにとって不可欠です。一方多様性は負の側面として様々な障壁や紛争をもたらしてきました。まさに人類の歴史は多様性による発展と対立の歴史であると言われる所以です。人類歴史の中で過去に例をみない次元でグローバル化が進む現在の国際社会では、狭い時間空間に凝縮された多様性がもたらす負の側面が飛躍的に強くなり、様々な対立や紛争が世界に蔓延しつつあると思います。21世紀は「多様性の爆発の世紀」になる可能性すらあります。温度が連続的に変化し、ある時点で固体から液体へ、さらに気体へと全く異なる次元へと非連続的に物質が変化する、そのような大きな変革期を人類は迎えているのではないかと思います。21世紀のグローバル化社会においては多様性を維持しながら、多様性が生み出す障壁を乗り越えることが人類の生存にとり不可欠だと思えます。

「調和ある多様性」の重要性

21世紀のグローバル社会に生きるためには、多様性を理解し、尊重し、維持することであり、かつ多様性を積極的に取り込みイノベーションの創造に役立てることだと思えます。すなわち、「調和ある多様性の創造」によってのみ、グローバル社会の平和維持や、経済や社

会活動に対するイノベーションを起こすことができると思えます。さらに、このことにより人類社会のさらなる発展があると思えます。皆さんが学んだ大阪大学は学問の府です。大阪大学では物事の本質を見極める研究を行うとともに、何が物事の本質であるかを見極める能力を有した人間を育成する努力を行ってきました。大学は「学問の府」であり、教育や

ような心構えが必要でしょうか？ 私は多様性を認め、尊重すること、すなわち異文化の相互理解と相互尊重が重要と考えます。そのためには相手の心、相手の立場に自分を投影して物事を判断する、論語にあります言葉「恕」の心、すなわち、「寛容の心」が必要です。また、他と自己との共存・共生が必要です。



研究活動により社会に貢献するという役割は過去、現在、未来において不変です。そのうえで、21世紀の大学には更なる役割があります。それは学問による「調和ある多様性の創造」によりグローバル社会に大きく貢献することです。学問は芸術、スポーツや経済活動等と同じく人類共通言語です。これら人類共通言語は様々な障壁を乗り越える大きな力を有しています。学問を介する人材交流により、多様性の維持とそれが生み出す障壁の克服という、相反することの両立が可能となります。学問を介する世界規模での人材交流により異文化の相互理解や尊重を今まで以上に推進する必要があります。大学はこのように、学問による「調和ある多様性の創造」によりグローバル社会に大きく貢献しなければなりません。大阪大学で学問を学んだ皆さんは、21世紀のグローバル社会で大きな役割を担うことになります。

己を知り、己を磨く

では、調和ある多様性を創造するにはどの

この「共に生きる」心こそが第5波という大きな波に飲み込まれつつある21世紀のグローバル社会を生きるには欠かすことができない要素だと思えます。様々な文化や宗教を異にする人類が共存共栄していくためには、その事実を理解し、それを尊重する、そして共生する。グローバル社会における基本的な心です。この根底にはまず己を知り、自国を愛し、そして自国の文化を理解し、かつ尊重することが必要です。自分自身を、自国を愛することができなくて、それらを誇りに思うことができなくて、どうして他人や他国を理解し尊重することができるでしょうか？そのためには己を知り、己を磨かなければなりません。

さて、どのような組織や個人でも、過去の歴史や生い立ちに由来し、経験はDNAとして受け継がれています。皆さんが未来を語るときには決してそれらを無視できません。本日を契機に、皆さんは「大阪大学で学んだ」という共通の歴史を有することになりました。大阪大学卒業生であるということは、社会から「選ばれ

た人」として見られ期待もされますが同時に、社会に対する責任も有します。「己を知る」ためにはまず大阪大学を知る必要があります。では、皆さんが学んだ大阪大学とは一体どのような大学でしょうか。大阪大学を卒業されるにあたり、皆さんの未来を形成する重要な一部になる大阪大学を今一度考えてみたいと思います。

大阪大学の原点：「適塾」

「大阪にも帝国大学を」という地元大阪府民の熱意と、本日の卒業式で成績優秀な学生に贈られる「楠本賞」という名前でも今も残っている大阪府立医科大学長でのちに第二代総長を務めた楠本長三郎先生や大阪府知事の柴田善三郎氏ら関係者の努力により、1931年、医学部と理学部の2学部からなる「大阪帝国大学」が、長岡半太郎初代総長の下、我が国第6番目の帝国大学として誕生しました。

江戸時代末期の1838年、緒方洪庵が「新知識をもって世の中の人を救う」ことを目的に私塾として設立した「適塾」の自由な学問的気風と先見性は、大阪府立医科大学を経て、大阪帝国大学医学部と理学部へと繋がります。1933年には大阪工業学校が工学部として加わりました。戦後、新たに法文学部が加わった際に、江戸時代後期、大坂町人が町人のために漢学や国学などを伝習した「懐徳堂」の蔵書類が、懐徳堂文庫として本学に寄

贈され、大坂の町に息づいた独創的な学問と思想・文化を受け継ぐに至りました。1949年に新制大学としてスタートした際には、法文学部を文学部と法経学部へ改組し、現在の総合大学としての骨格が整いました。その後、本学は、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに、2004年の国立大学法人化、2007年の大阪外国語大学との統合を経ながら、我が国を代

表する総合大学として現在の姿になりました。大阪大学の原点でもある適塾について、もう少しお話しします。適塾には全国から1000名以上の塾生が集まり、日夜勉学に励みまし。その中には塾頭を務め、後に慶応義塾大学を創設した福沢諭吉、安政の大獄で25歳の若い命を落とした橋本左内、日本赤十字社の前身の博愛社を創設した佐野常民、近代衛生行政を確立した長与専斎、明治政府で近代的な軍隊制度を創った大村次郎、外交で列強各国と対峙し活躍した大鳥圭介、さらには1877年に設立された東京大学医学部の初代総理を務めた池田謙齋など、様々な分野で維新前後のリーダーとして活躍した人々が適塾で育ちました。適塾が明治初期における我が国の近代化に大きな役割を果たしたのです。

皆さんが学び、本日卒業する大阪大学には、緒方洪庵の「人のため、世のため、道のため」という精神、そこで学んだ若者たちの偉大なる志、大坂町人の学問への情熱、そして

大阪府民の熱意が脈々と受け継がれているのです。人類の未来は、若い皆さん一人一人の双肩にかかっています。社会が皆さんに求めているところは、様々な分野で責任あるリーダーとして社会に対する責務を果たすことです。あるいは、大阪大学で養われた知的創造活動の更なる飛躍です。人類が多様性の壁を乗り越えて心豊かな発展を遂げることができるように世界に羽ばたいてください。このようなことは大阪大学で研鑽を積み重ねた皆さんだからこそ成し得ることです。

「適塾」から「世界適塾」へ

2031年には、大阪大学は創立100周年を迎えます。大阪大学の夢は創立100周年を迎える時には、「世界適塾」として世界トップ10の研究型総合大学になることです。その理念は学問による「調和ある多様性の創造」により心豊かな人類社会の発展に貢献することです。

閉塞と混乱の江戸末期、適塾で学んだ先輩方が、我が国に新たな時代の風を吹き込んだように、皆さんにも、大きな「志」と「夢」を持って、21世紀のグローバル社会で活躍していただきたいと思えます。「大阪大学で学んだ」ということを誇りに思っていたくとも、大阪大学を卒業したことを忘れることなく、これからの皆さん自身の夢の実現のためにも目の前の山を登りきってほしいと思えます。

夢は実現することが困難だから夢と呼ばれます。現実と夢があまりにもかけ離れているが故に、人は夢を決して手に入れることができない遥か彼方の出来事だとあきらめてしまっています。しかし、夢を忘れることなく、夢に向かう努力を一步一步していると、いつの日か夢が近づき、やがて現実のものとなります。

「夢は叶えるためにこそある」

どうか、そう信じてこれからの長い人生を歩んでいってください。

最後になりましたが、皆さん一人一人が今日の良き日にこの大阪大学から新たな一歩を踏み出し、これからの長い生涯、健康で幸運に恵まれ、悔いのない人生を送られることを祈ります。

本日はご卒業、修了、誠にありがとうございます。

平成27年3月25日
大阪大学総長 平野俊夫

2015 Graduation Ceremony and Graduate School Commencement Ceremony Living in the Century of an Explosion in Diversity

First of all,

Please permit me to extend my sincere congratulations to each and every one of you who completed your studies at your respective schools and are embarking on a new life. As the president of Osaka University, I'd like to heartily congratulate you on your efforts. I also would like to express my admiration for your parents who supported your achievement of these goals.

Today you're graduating from Osaka University with an advanced degree. You must be filled with expectations for what lies ahead. You have gained experience in classes, laboratories, clubs, and social activities at Osaka University. My hope is that whatever goal you aim for you will become reliable leaders in that field and make use in the world the knowledge and skills you've cultivated at Osaka University. I hope you will contribute to the future of Japan as well as the development of human society and improved welfare. I hope you believe you have the quality and ability to be active in the world as leaders. I also hope you will move in society with grace and responsibility.

The history of development borne of diversity and of conflicts caused by diversity

First, I'd like to talk about what future will be waiting for you. I think now we're in the "Century of an Explosion in Diversity." Since the birth of Homo sapiens in Africa some 200,000 years ago, humans have moved and spread into Europe, Asia, Australia, and American continents over tens of thousands of years. During that time, 4 human species, the Khoisan, Caucasoid, Mongoloid, and Aborigine, were born.

Between 10,000 and a few thousand years ago, civilization emerging in locations such as Mesopotamia, Egypt, the Indus Valley, China, and Maya flourished. There were years when these civilizations maintained a peaceful relationship with each other for geographical reasons. They were born independently, but transformed while involving surrounding areas and affecting each other.

In that process, a variety of religions such as Judaism, Christianity, Islam, Buddhism, and Hinduism were born with a growing diversity in language and culture. The four human species were fragmented and currently a variety of races live on the earth. Possessing a range of diversity, these people affected each other during the long history of mankind, causing conflicts, even wars in some cases. Such diversity-related conflicts were not just in a subservient-dominant relationship, but developed science and technology such as gunpowder and weapons.

Exchange of people of diverse backgrounds also led to innovative changes in human society. Diversity also brought about spiritual richness to human society. Certainly the long history of mankind is the history of development borne of diversity and of conflicts and wars caused by diversity.

The wave of globalization in the history of mankind

If we define the slow migration between con-

tinents by Homo sapiens and their diffusion to the five continents as the first wave, the birth of agrarian civilization and its spread to the surrounding area during the period between 10,000 year B.C. and the 12th century will constitute the second wave. During that period, the foundation of diversity in language, race, custom, culture, and religion in current human society was made.

The third wave of globalization took place during the 400 years between the 13th century and 17th century. The emergence of the Mongol Empire, which built a world empire including Central Asia and part of Europe, brought about regional-scale land traffic, opening the Age of Exploration which stretched from Asia to the east side of Africa. In the 16th century, Portugal, Spain and other countries connected the continents of Eurasia, Africa, Australia, and America by the seven seas.

The fourth wave is a series of events including the colonialism which started from the industrial revolution at the end of the 18th century in England, imperialism in Europe, the emergence of the U.S., resulting two world wars, socialism, and the Cold War after World War II. During that time the world major player shifted from the UK to the U.S. The wave of globalization terminated with the end of Cold War, symbolized by the breakup of the whole Soviet Union and the collapse of the Berlin Wall at the end of the 20th century.

Today, the fifth wave of globalization which started at the end of the 20th century is the wave caused by the unprecedented extreme narrowing of the earth caused by the rapid development of science and technology based on the relativity theory and quantum mechanics that flourished in the 20th century.

The 5th wave of globalization

In the history of mankind, traffic means developed slowly until the industrial revolution. 200,000 years ago, it took tens of thousands years for humans to migrate from Africa to North America. Tens of thousands of years ago, humans obtained means of migration by animals such as horses.

Later they obtained not only maritime transport means such as ships, but also compasses invented in China in the 1st century, which made it possible for people to navigate waters without getting lost. People developed means for using manpower, animal power, as well as natural energy such as wind and water. Thanks to steam engines, internal-combustion engines, motors, and generators invented in the 18th and 19th centuries, people succeeded in efficiently generating energy not dependent on nature.

By using such technologies, means of transportation such as cars, railways, and airplanes were produced, which made it possible for people to travel quickly. People crossed the continents on foot over time, but now, the growing use of airplanes has made it possible for people to cross it in just half a day. If the supersonic airliners under development are achieved, it will take only three hours to travel from Tokyo to New York. Artificial satellites can circle the globe in just an hour.

People used smoke signals and carrier pigeons

as communication means; however, through the invention of telegram and radio, now information gets around the world in a flash via the Internet. Furthermore, the Age of Internet of Things (IoT) is about to begin. The world is going to be united through the Internet.

Through the development of means of transportation and conveying information, the earth has been narrowed slowly but surely in the last 100 years. Compared with changes that happened in the past 200,000 years, today, the earth is narrowing at a speed beyond time and space. Humans have been swamped by the wave of globalization several times, but the wave of globalization human beings are facing right now are different from that in the past. In other words, the foundation of our life, the earth itself, has drastically become small. In that sense, we are swallowed up by an unprecedented wave of globalization. That is, we are in the middle of the greatest revolutionary era since the birth of new human beings 200,000 years ago.

The 21st century, the century of an explosion in diversity

We need to consider what will take place in our 21st century globalized society. In addition to the development of means of transportation and conveying information, there is an issue of rapidly-growing population. The world population remained in hundreds of millions for a long time. The population exceeded 1 billion in the 19th century and then rapidly increased, standing at 7 billion now. It is expected that it will grow beyond 9 billion in 2050.

In this way, not only in terms of means of transportation and conveying information, but also in terms of population growth, the earth is surely becoming smaller and smaller. Combined with the increased population, diversity which existed on the relatively wide earth for a long time, in the midst of this 5th wave of globalization, is going to be epitomized in a narrowed time and space. In addition to this condensed diversity, rapid population growth and technological innovation have raised intricately-intertwined global problems such as food problems, energy crisis, environmental problems, infectious diseases, and biodiversity.

Diversity -- differences in language, race, customs, culture, and religion, and political form -- is essential for creating groundbreaking innovation and a spiritually affluent human society; however, diversity has also brought about negative results such as obstacles and conflicts. That's why it is said that the history of humanity is also the history of development borne of diversity and of conflicts caused by diversity.

In today's increasingly globalized world, unprecedented in size in human history, the negative side of diversity epitomized in narrow space and time has grown even stronger and various conflicts are taking place throughout the world. There is even a possibility that the 21st century will become the "Century of an Explosion in Diversity." I think that humans are in a phase of major change in the same way continuous change in temperature turns a solid into liquid, into gas, and then into a totally different sphere, non-continuously.

In the 21st century globalized society, overcoming barriers caused by diversity will become essential for humanity's survival.

Importance of Harmonious Diversity

In order to live in a global society, understanding, respecting, and maintaining diversity is important. It is also necessary to positively support diversity and use it for the creation of innovation. I believe only the "creation of harmonious diversity" can maintain peace in a global society and create innovation in economic and social activities and that this will lead to the further development of human society.

The Osaka University where you have studied is a center of scholarship. Osaka University has conducted research to ascertain the true essence of things and has made efforts to cultivate personnel who will possess the ability to find the essence of what is true in multiple fields. A university is a center of scholarship. The role of a university, to contribute to society through education and research, never changes; however, I think universities in the 21st century will have an additional role -- making a great contribution to a more globalized society by creating "harmonious diversity through scholarship."

Scholarship, along with sports and economic activities, is a kind of language common to all humankind. These languages common to all humankind have the power to overcome barriers. Exchange among humans by means of scholarship makes it possible to achieve the maintenance of diversity, and, at the same time, to overcome barriers caused by it. That's why we must further promote person-to-person exchange via scholarship on a world scale. In this way, universities can contribute to the globalization of society through the "creation of harmonious diversity." As graduates of Osaka University, you will play a great role in global society.

Know yourself and cultivate your power

How should we prepare ourselves to create harmonious diversity? I think it's important to recognize and respect diversity, in other words, to have mutual understanding and mutual respect for different cultures. To this end, we need to understand other people's ways of looking at things and feelings. As Analects of Confucius said, we must be open-minded. Thus, both the "foreign" and "self" components need to coexist in time and place.

I think being able to live together harmoniously with others is essential for people who will be active in our 21st century globalized society which is being swallowed up by the 5th big wave. For nations and people with different cultures and religions to live in harmony and prosper, it's critical to understand diversity, respect others and harmoniously live together in society. This is a necessary frame of mind for people living in a global society.

To this end, it's necessary that they know themselves, love their country, and understand and respect their own culture. If one cannot love one's self and one's nation and not be proud of such, how can such a person understand and respect other people and other nations? For that purpose, it's necessary that people know themselves and cultivate their power.

For any organization and human being, the present condition of the organization or the human comes from their roots. Their experiences are handed over as a kind of DNA. When speaking of the future, you cannot neglect them. All of you share a common history that you studied at Osaka University. Being graduates of Osaka University, you will be viewed as persons selected from society and you will have the responsibility to give back to society accordingly.

To know yourselves, you need to know Osaka University. So, what is the Osaka University where you have studied? On this day of your graduation, let's think about the Osaka University that has become and will remain an important part of your life.

The root of Osaka University: Tekijuku

Thanks to the enthusiastic support of the citizens of Osaka, then president of Osaka Prefectural Medical University and the second president of Osaka University, KUSUMOTO Chozaburo (you may recognize his name from the Kusumoto Awards that are given to outstanding students in this graduation ceremony), then governor of Osaka Prefecture SHIBATA Zenzaburo, and other university personnel, Osaka Imperial University was founded in 1931 with two schools, Medicine and Science. It was the 6th imperial university and its first president was NAGAOKA Hantaro.

However, our university's roots actually reach back to Tekijuku, a private "place of learning" founded in 1838 by the doctor and scholar of Western sciences OGATA Koan who worked to save people with then state-of-the-art knowledge. Tekijuku's open academic culture and forward-looking spirit gave birth to Osaka Prefectural Medical School and, eventually, to the Schools of Medicine and Science at Osaka Imperial University. In 1933, Osaka Industrial University merged with Osaka Imperial University, becoming the School of Engineering.

When the School of Law, Economics, and Letters was established following the end of World War II, collections of books regarding traditional Chinese and Japanese learning possessed by Kaitokudo, a place of learning of Chinese and Japanese studies for merchants and founded by merchants in Osaka in the late Edo Period, were passed on to Osaka University. These book collections were symbolic of the original scholarship and the "Osaka spirit" that our university inherited with these tomes.

With the introduction of the new education system in 1949, the School of Law, Economics, and Letters was divided into the School of Letters and the School of Law and Economics, setting up a structure for our current comprehensive university. Osaka University continues to grow under the motto "Live Locally, Grow Globally." After going through transitions such as the legal status change to that of a national university corporation in 2004 and the merger with Osaka University of Foreign Studies in 2007, Osaka University now represents our country as a genuine comprehensive university.

Let me explain about Tekijuku, one of the roots of Osaka University. More than 1,000 students came to Tekijuku from all over Japan and studied day and night. The students included FUKUZAWA Yukichi who served as a school chief and founded Keio University in his later days, HASHIMOTO Sanai who was killed at the age

of 25 in the Ansei Purge, SANO Tsunetami who found Hakuaisha, the predecessor of the Japan Red Cross, NAGAYO Sensai who built the foundation of Japanese medical care system and public health system, OMURA Masujiro who created a modern military system for the Meiji government, OTORI Keisuke who diplomatically confronted the Western powers, and IKEDA Kensai who served as the first dean of the Faculty of Medicine at The University of Tokyo built in 1877. Thus, Tekijuku produced persons who were active as leaders in various fields before and after the Meiji Restoration. Tekijuku played a major role in the modernization of Japan in the early Meiji Period.

In the Osaka University where you have studied, Tekijuku's spirit of "responsible ethics, concern for people, for society," the aspirations of young people who have studied here, the Osaka merchants' passion for scholarship and their eagerness to build an imperial university in Osaka, these have been handed down to you from the earlier generations. Our future depends on you young people. Society asks you to fulfill your responsibilities as leaders in a variety of fields, and for the further promotion of inquiring minds as a part of intellectual creative activities nurtured at Osaka University. I hope you will fly high in the world so that human beings can develop spiritually rich society by overcoming barriers in diversity. You who have studied and conducted research at Osaka University can achieve this goal.

From "Tekijuku" to the "World Tekijuku"

Osaka University will celebrate the 100th anniversary of its founding in 2031. Osaka University's greatest aspiration is to become one of the world's top 10 research universities by our 100th anniversary in 2031, to become a "World Tekijuku." The principle is to make a contribution to the development of a spiritually affluent human society.

Just as our predecessors who studied at Tekijuku brought new perspectives to Japan during a period of stagnation and turmoil at the end of Edo Period, I want you to have a great aspiration and dream and be active in the 21st century globalized society. I hope you will be proud to have studied at Osaka University and keep in mind that you graduated from this University and you will reach the tops of mountains in your own way so that you can make your dreams come true.

Achieving dreams is difficult. That's why they are called dreams. A dream is far from reality and cannot be achieved easily. So it's only too easy to think that achieving a dream is impossible and, thus, give up. However, if we hold on to our dreams and continue to make every effort to achieve them, one day, someday, those dreams just might come true.

Dreams are meant to be achieved.

Please hold to this throughout your long lives.

Allow me to close by wishing you all good fortune. May each of you live a long life filled with health and happiness. My sincerest congratulations to you all!

March 25, 2015
Toshio HIRANO
President of Osaka University

平成27年度入学式—総長告辞

「歴史的大変革期を生きる」



大いなる夢と希望をもった6,415人が阪大へ

穏やかな春の日差しに恵まれた4月2日(木)、大阪城公園周辺は満開の桜を愛でる人たちにぎわい、その一角にある大阪城ホールで平成27年度入学式が行われました。式には、新入生や家族、大学関係者らが出席し、学部生3489人、大学院生2926人の新阪大生の入学・進学を歓迎しました。

学部入学生を代表して人間科学部の長山広太郎さんが「適塾の自由闊達な精神をもって勉学に励みたい」と宣誓。長山さんは「大学では学問を第一に、またアルバイトなども経験して内面的に成長したい。将来は世界へ出て地域開発などの仕事に就きグローバルに活動するのが希望です」と話していました。また、学生席の最前列に座った工学部の渡部ありささんは「始まりが大事なので早めに来ました。初めての一人暮らしなど不安もありますが、ちゃんと勉強しサークル活動なども楽しみたい」と、新生活への期待に笑顔を輝かせていました。

平野俊夫総長は告辞の中で、3月末まで放映されたNHK朝の連続テレビ小説「マッサン」の主人公のモデルとなった竹鶴政孝さんが大阪大学工学部の前身大阪高等工業学校の卒業生だったことを紹介。「マッサンは日本人が世界一のウイスキーを創るという大きな夢を実現させた。皆さんも目の前の山を一つ一つ登りきるにより、自分の夢を実現するための第一歩を大阪大学で踏み出してください」と話しました。



大阪大学に入学ならびに進学されました皆さん、おめでとうございます。また、ご臨席いただきましたご家族の皆さま、関係者の方々に心よりお祝い申し上げます。

あらゆる可能性を秘めた前途洋々たる皆さんは、本日、大阪大学の一員として、あらたな人生を踏み出すその第一歩を迎えられました。大阪大学総長としてこの上もない喜びであり、大阪大学は心から皆さんを歓迎いたします。

適塾から大阪大学へ、そして世界適塾へ

はじめに、皆さんがこれから過ごす大阪大学について、少しお話をいたします。大阪大学は、1931年に我が国第6番目の帝国大学として創立された大学ですが、設立の準備金や当座の運営資金を大阪の有志が出資して開設されたという歴史的経緯を持つ大学です。その大阪大学の原点は、江戸時代末期の1838年に緒方洪庵が開いた「適塾」に見いだせます。外国語学部の前身である大阪外国語学校出身の、すなわち皆さんの大先輩である司馬遼太郎が小説『花神』の冒頭で、適塾を大阪大学の「前身」、緒方洪庵を「校祖」と表現しています。

適塾には全国から1000名以上の塾生が集まり、日夜勉学に励みました。その中には塾頭を務め、後に慶応義塾大学を創設した福沢諭吉、彼の後に塾頭を務め、我が国の医療制度、公衆衛生制度の基礎を築いた長与専斎、安政の大獄で25歳の若い命を落とした橋本左内、日本赤十字社の前身の博愛社を創設した佐野常民、明治政府で近代的な軍隊制度を創った大村益次郎、外交で列強各国と対峙し活躍した大島圭介、さらには1877年に設立された東京大学医学部の初代総理を務めた池田謙斎など、様々な分野でリーダーとして活躍した人々が適塾で育ちました。大阪大学医学専門部の卒業生で、ブラックジャック、鉄腕アトムなどで有名な漫画家の手塚治虫が自らのルーツを描いた「陽だまりの樹」という作品があります。このなかで描かれている手塚良庵は手塚治虫の曾祖父で、緒方洪庵の弟子として福沢諭吉らとともに学んだ蘭方医です。彼らは「人のため、世のため、道のため」という緒方洪庵の精神にもとづき、明治初期における我が国の近代化に大きな役割を果たしたのです。適塾は、医学を伝習する場所として開設されましたが、医者を目指していた者

だけが集まったわけではありません。長与専斎は「元来適塾は医科の塾とはいへ、其实蘭書解説の研究所以て、諸生には医師に限らず、兵学家もあり、砲術家もあり、本草家も舎密家も凡そ当時蘭学を志す程の人は皆この塾に入りて、其支度をなす…」と回顧しています。このように、舎密すなわちケミカルの分野など、蘭学を介して様々な西洋の学問にも塾生は興味を持っていました。

このように適塾の自由闊達な学問的気風と先見性の下で学んだ若し有志が、明治維新という我が国の新しい時代を切り開く大きな原動力になり、その適塾の精神は1869年に設立された大阪仮病院に継承され、大阪医学校や大阪府立医科大学を経て、1931年に医学部と理学部の2学部からなる我が国6番



目の帝国大学となる大阪帝国大学へと繋がります。その後1933年には、1896年に設立された大阪工業学校が工学部として加わりました。戦後、新たに法文学部が加わった際に、江戸時代後期、大坂町人が町人のために漢学と国学などを伝習した「懐徳堂」の蔵書類が、懐徳堂文庫として本学に寄贈され、大坂の町に息づいた独創的な学問と思想・文化を受け継ぐに至りました。

1949年に新制国立大阪大学として再スタートした際には、法文学部を文学部と法経学部に改組し、現在の総合大学としての骨格が整いました。その後、法経学部は、法学部と経済学部に改組され、歯学部、薬学部、基礎工学部や人間科学部などを新設し、2004年の国立大学法人化を経て、2007年には、1921年に設立された大阪外国語大学との統合により、現在、11学部、16研究科、5附置研究所を擁する我が国屈指の研究型総合大学に成長しました。1931年の本学開学当時、医学部と理学部あわせて86名だった新入生数は、80年を経て、学部学生の定員では国立大学の第一位の規模となり、学部学生と大学院生合わせて6400名に及ぶ皆さんが毎年入学されるまでに発展しました。また大阪大学の現役の学生は様々な分野で大活躍しています。例えば、去年は文学研究科哲学の修士2年

生の糸谷哲郎さんがプロ将棋の最高峰である竜王を獲得しました。また現役の阪大生が世界で13人目、女性としては世界初のレゴマスタを獲得、学生落語日本一や全国学生環境活動コンテスト2年連続グランプリを獲得するなど大活躍しています。さらにエコノミスト誌が昨年発表した企業の人事部の評価ランキングで阪大生は日本1位に輝きました。



このように、177年前に設立された「適塾」を原点として、「懐徳堂」の精神を受け継ぎ、大阪府民の熱意に支えられた本学は、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに、我が国を代表する国立総合大学として、世界に向かってたゆみなく発展を遂げるとともに、数多くの優れた研究者、教育者、文化人、そして政財界など各界の指導者や卓越した人材を世に輩出してきました。今から16年後の2031年には大阪大学は創立100周年を迎えます。その時、大阪大学は、「世界適塾」として世界でトップ10に入る研究型総合大学になることを目指しています。適塾には日本各地から志ある若者が集まり、適塾で学んだ新しい知識や技量を携え、再び全国に散らばり明治維新の新しい時代を切り開きました。「世界適塾」には、世界中から向学心溢れる人たちが大阪大学の学問と研究を目指して集まり、学問や研究を究め、やがて大阪大学から世界中に羽ばたいていきます。「世界適塾」の理念は学問による「調和ある多様性の創造」により心豊かな人類社会の発展に貢献することです。

学問による「調和ある多様性の創造」

20万年位前にアフリカを起源としてホモ・サピエンスが誕生して以来、人類は数万年の歳月をかけてユーラシア、オーストラリア、アメリカ

大陸へと移動、拡散していきました。そして、1万年から数千年前にメソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明、中国文明、マヤ文明等の様々な文明が各地に開花しました。その過程で様々な宗教が生まれるとともに、言語や文化などの多様性が生まれてきました。これらの様々な多様性を有する人類は長い歴史のなかでお互いが影響し合い、かつ対立を引き

起こし、時には戦争すら引き起こしてきました。また多様性が交わることで人類社会に様々な革新的な変革がもたらされました。さらに多様性は人類社会に心の豊かさをもたらしました。このように人類の長い歴史は多様性がもたらす発展と多様性ゆえに生じる対立や戦争の歴史であったと言えると思います。そして今、20世紀に花開いた科学・技術の急激な発展により人類は大きなグローバル化の波に飲み込まれています。例えば飛行機の普及によってわずか半日で大陸を横断することができます。またインターネットにより瞬時に情報が世界中に伝わるようになりました。移動手段や情報伝達手段の発展に加えて、急激に進む人口の増加があります。現在70億人、そして2050年には90億人を超えると推定されています。このように、移動手段や情報伝達手段のみならず、人口増加の観点からも地球は飛躍的に狭くなりつつあります。長らく比較的広大な地球に存在していた多様性は今狭い時間空間に凝縮されようとしています。多様性の凝縮により21世紀は多様性の爆発の世紀になる可能性すらあります。加えて急激な人口の増加や技術革新は食料問題、エネルギーや環境問題、さらには感染症問題や生物多様性の危機など、様々な要因が複雑に絡んだ地球規模の深刻な問題を投げかけていま

す。このように、今、人類はかつて経験したことがない、地球規模の歴史的な大変革期に直面しています。我々大学人はこのような地球規模の様々な問題を解決していく道を探求して行かなければなりません。これは21世紀のグローバル社会に生きている皆様や我々大学人の責務です。

さらに21世紀の大学に求められているもう一つの大きな責務があると思います。それは学問による「調和ある多様性の創造」です。グローバル社会では、言語・人・文化・宗教・政治などの多様性が存在します。これらの多様性は人類社会の発展の原動力であるとともに、人類社会を豊かにしてきました。その一方、時として様々な障壁となり紛争や戦争すら引き起こす基になります。大学には人類に



普遍的な共通言語である「学問」が存在します。学問は芸術、スポーツや経済活動などと並んで、人類共通の言語であり、多様性もたらす様々な障壁を乗り越える大きな力を有しています。学問をすることにより、皆さんは言語や文化や宗教を異にする世界中の様々な人々と友達になり、人の輪を世界中に際限なく広げることができます。そして、多様な背景を持つ世界中の人と学問を介して得られた永遠に続く「絆」は、経験と人的交流を持って拡散し、世界中に「調和ある多様性」をもたらすことが可能です。これこそが、21世紀の大学の大きな役割です。

糟粕を嘗る勿れ

初代総長で、我が国における原子物理学の父であり、土星型の原子模型を提唱した長岡半太郎先生は次のような言葉を残しております。

「糟粕を嘗る勿れ」

長岡総長はこの言葉を直筆の額として本学に残しており、現在、それは総長室に掲げられています。糟粕とは酒の搾りかすで、滋養すなわちスピリッツをとりきった不要物、精神のない遺物などを意味します。「糟粕を嘗る勿れ」とは、すなわち「先人の精神を汲み取ら

ず、形だけをまねるようなことはするな」という意味です。この精神のもとに、湯川秀樹先生は大阪大学理学部で中間子理論を完成されました。この研究により先生は大阪大学理学博士の学位を取得されるとともに、日本人として初めてのノーベル賞を受賞されました。湯川先生の愛用の黒板は理学部にあり、学生らが自由に使用して意見交換会などに活発に使われています。

これこそが適塾から現在につながる大阪大学で、皆さんに体得してほしいと願う学問の姿勢です。大阪大学は、皆さんが常に先進的で独創的な研究ができる環境を提供します。しかし、その機会は皆さん自らが求めなければなりません。常に独創的であるためには、「物事の本質を見極める」姿勢が必要になります。

漫然と過ごすだけでは見逃してしまう疑問、不条理、変化、そのようなものに皆さん自身が気づく感受性を養わなければなりません。たとえば、皆さんが大学で行う様々なクラブ活動、NPO法人活動への参加、夏季休暇を利用した海外研修など、大学のキャンパスや周辺にその機会は溢れています。大学院生の皆さんにとっては、実験やフィールド調査等を介して、より具体的に目の前の自然現象や社会現象に潜む物事の本質を追究する機会が溢れています。その機会を決して逃さないことです。その機会をものできるか否かは皆さん一人一人の感性、好奇心、観察力、考察力、粘り強さと、そこから芽生える「ひらめき」にかかっています。今までのように先生が一つ一つ物事を教えてくれる訳ではありません。教員も真の答えを求めて日夜研究しているのが大学です。ただ机に座って授業を受けていればそれで物事の本質がわかる訳ではありません。また、物事の本質が皆さんのもとに向こうから微笑んで近づいてくる訳ではありません。それは、自ら求め、心の準備ができていない人へのみ、ある日、ある時、突然訪れるのです。

胡蝶の夢

荘子の中に次のような一節があります。（「荘子」、岸田陽子訳、徳間文庫より）

「昔莊周夢に胡蝶となる。栩栩然として胡蝶なり。自ら愉みて志に適えるかな。周たるを知らざるなり。俄然として覚むればすなわちきよきよ然として周なり。知らず、周の夢に胡蝶となるか、胡蝶の夢に周となるかを」

夢の胡蝶が今の自分を夢見ているのか、それとも今の自分が夢で蝶になっているのか?さらに、荘子は、何が真実かという問いかけに対して、この世の中には絶対的に真実といえることはない。ものの見方を変えれば、例えば己を「これ」と呼び、他を「かれ」と呼ぶ、しかし「かれ」からは己も「かれ」、「かれ」も「これ」である。このように物の見方は、立場をかえればなにが正しく、なにが誤りであるとは言い難い。

この荘子の考え方の中に、「物事の本質」というものを垣間見ることができます。皆さんがこれまで学んできた知識はすべて、ある一面からみた知識に過ぎません。荘子が言うように物事は見方を変えれば全く異なる姿が見えてきます。皆さんもこれからは様々な問題意識をもって、ある事柄を一面から見ることなく、様々な観点から見、すなわち複眼的に見る努力をして欲しいと思います。そこに物事の本質を観ることができます。

歴史的な大変革期を生きる

皆さんは、今の大変革期を生きるにあたり、日本は勿論もっと広く世界に目を向け、「社会の変化に対応する」力を身につけなければなりません。では、現代の社会が求める人材、その能力とはどのようなものなのでしょうか?例えば、決断力、行動力、そして言語運用能力を含むコミュニケーション能力。これらは、しばしば優れたリーダーの素質として語られます。確かにこれらの能力を身につける必要はあります。しかし、急速に変化し続ける現代社会においては、これらの汎用的能力だけでは十分ではありません。これからの社会が求める人材とは、多元的な課題に潜む物事の本質を見極め、従来からの常識や考え方を超えた課題解決を先導できる人材であると私は考えます。「物事

の本質を見極める力」とは、現象として認知可能な事象の奥に潜む、その事象のカギとなるもの、そしてその仕組みを見極める力を意味しています。「一芸に秀でた者はすべての道に通じる」という言葉があります。この力の基盤となるのは、特定の分野をとことんまで究めた高度な専門性です。大学が最先端の研究を行い、それに基づく高度な専門教育を行う意義はここにあるのです。

また、物事の見方の転換も重要かもしれません。例えば、科学技術の力で自然を征服するという発想ではなく、如何にすれば人類は自然と共生できるかを真剣に考える必要があります。また老・病・死など人間が避けて通れない問題も、今までは生命科学や医学の発展により克服するという姿勢で研究が行われてきました。しかしそのような発想を転換し、どのようにすれば人類はこれらの問題と共生し心安らかな人生を全うできるかを、見つめなおす必要もあるでしょう。このように、荘子の胡蝶の夢の例のように、物事を見る時一面から見るのではなく、複眼的に様々な観点から見る必要があります。

さらに、物事の全体像を捉える「俯瞰的視点」も重要です。「木を見て森を見ず」という言葉が示すように、一本の木にとって都合の良いことが、必ずしも森全体にとって最善の策とは限りません。短期的にはその木にとって最善の策であっても長期的に森全体にとって悪影響があれば、結局はその木にとって致命的な問題となるのです。

これらの視点を養うのは、幅広い教養教育です。教養教育は、単に知識の蓄積ではなく、広く柔軟な視点の獲得に繋がるものとして重要です。さらに、グローバル社会においては、人類の活動のフィールドはますます拡大していき、異なる言語、文化、民族、宗教、国の相手との関係構築、そして協働が必要となります。そのような状況に適切に対応するためには、孔子の言葉である、相手の心や立場を鑑みて物事を判断する「恕」の心、即ち「寛容の心」と、他者の異なる文化や考え方を理解・尊重する「共生の心」を育むことが重要です。そして、この前提として忘れてはならないのは、「己を知る」ことです。多様性を持つ人類が共存共栄していくためには、まず自己を知り、自国の文化を理解し、かつ尊重することが必要です。自分自身を、自国を愛することができなくて、それらを誇りに思うことができなくて、どうして他人や他国を理解し尊重することができるでしょうか?

皆さんは、大阪大学で思う存分学んでほしいと思います。さらに積極的に自ら問題意識をもって回答を求める努力をしてほしいと思います。また世界に目を向けてほしいと思います。積極的に海外に出かけて様々な国の人と交流してほしいと思います。大阪大学には様々なプログラムや機会があります。是非ともこれらを積極的に有効活用して歴史的な大変革期を生きてください。

夢を叶える——マッサンの夢、私たちの夢

皆さんは、今、大阪大学に入学という一つの大きな山の頂に立っているのです。皆さんはその頂に、どのような思いで立っているのでしょうか? ここまでの長い道のりを思い出しながら、感慨に耽り目の前の新しい景色を見つめているのかもしれませんが、あるいは、これから挑戦しなければならない、眼前に聳え立つ山々を仰いでいるのかもしれませんが、皆さん一人一人が見ている景色は様々で異なることでしょう。しかし、皆さんに共通しているのは、その景色は皆さんが今まで見たこともない、経験したこともない景色であるということです。



私は、常日ごろ若い人と話す機会があると、「目の前の山を登りきる」ことの重要性を語ってきました。いくら山に登っても頂上まで登りきらなければ頂上からの新しい景色を見ることはできません。皆さんの前には登るべき山として常に越えなければならない試練や困難、あるいは叶えたいと強く願う志や夢があるはずで、人は夢を心に、あるいは未来への希望を胸に目の前の試練や障害を乗り越えていこうと努力し、そして目の前に聳えている山を登っていきます。

人生における山では、頂上に立って初めてその山の高さがわかります。何より重要なことは、たとえ登りきった山が低い山であったとしても、登りきるにより、今まで見たこともない景色を見ることができるといことです。これから進むべき道が、挑戦するべき山が展望できるのです。人生における登山では、どこにも標識はありません。今、自分が何合目にいる

のか、それは誰にもわかりません。頂上に立ったとき、「自分が頂上に立ったこと」を初めて知るので、頂上は、それを求める努力をし、必ずあると信じている人の前に、突如現れます。それは心の準備ができていない人に突如訪れる「ひらめき」そのものです。

皆さんは本日晴れて一つの山の頂に立つことの喜び、その意味、そしてその先に広がる未来という素晴らしい景色を展望できることを実感しておられるはずで、1回でも苦しいプロセスを経て頂上に立つことができた人と、途中で下山した人では、大きな違いが生じます。今回の経験を忘れることなく、これからも目の前の山を一つ一つ登りきる努力を怠らず、目指すべき山の頂に立ってほしいと思います。長い人生では山もあれば、谷もあります。たとえ谷底に落ちて、それは次の山登りの絶好のチャンスと捉えて、次の山を、夢を目指せばいいのです。いつまでも未来への希望と夢を失うことなく、皆さんそれぞれの目の前の山を登りきってください。

3月末までNHKの朝ドラで放映されていたマッサンはニッカウキスキーの創業者で日本人初のウイスキー蒸溜技師の竹鶴政孝さんです。実はマッサンは大阪大学工学部の前身である大阪高等工業学校の卒業生です。マッサンは大正から昭和というあの激動の時代に変な苦労と努力をして、目の前の山を一つ一つ登りきるにより、世界一のウイスキーを創るとい、当時の日本では不可能と考えられていた大きな夢を実現させたのです。

「夢は叶えるためにこそある」

夢や理想は実現が困難だから夢であり理想と呼ばれます。現実と夢があまりにもかけ離れているが故に、人は夢を決して手に入れることができない遥か彼方の蜃気楼だとあきらめてしまいます。しかし、夢を忘れることなく、夢に向かう努力を一步一步していると、いつの日か夢が現実のものとなります。皆さんは未来という無限の可能性を持っています。どうぞ、この瞬間の、この感激を忘れずに、大いなる志と夢をもって、世界に羽ばたいてください。皆さんがそれぞれの夢を実現するための第一歩を大阪大学で踏み出されることを念じて私からの告辞とさせていただきます。

平成27年4月2日
大阪大学総長 平野俊夫

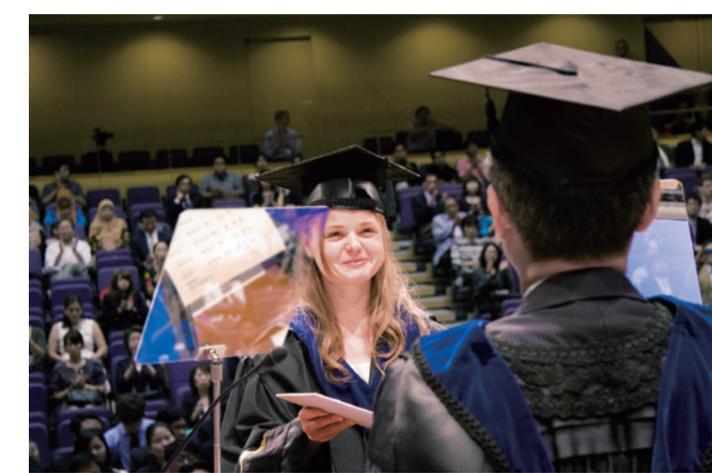
平成26年度
秋季卒業式・学位記授与式
— 総長式辞

2014年9月25日(木)、大阪大学コンベンションセンターで秋の卒業式・学位記授与式が行われ、学士36名、修士53名、博士・法務博士162名、あわせて251名(女子79名)に学位が授与されました。

秋の式では外国人留学生が多いことから(114名)、今年から英語による式辞で行うこととし、平野俊夫総長から、「大阪大学で学んだ皆さんには、グローバルに活躍できるリーダーとしての資質と能力が備わっていることを誇りに思い、品格と責任を持って社会に進んでいただきたい」との言葉が送られました。



動画 youtu.be/QJ1CwSg34RM



Undergraduate and graduate students, as you take your next step from Osaka University, it is my great pleasure to wish you my heartfelt congratulations. Today represents the culmination of hard work and diligent study. As the president of Osaka University it is my distinct privilege to congratulate you on this the day of your Graduation Ceremony.

I also would like to address the parents and relatives, the supporters of your pursuit of knowledge and truth, and express my deep respect while offering them congratulations for the accomplishments we honor on this day.

Graduate students, today you receive your degrees. I imagine your hopes and dreams will grow as you follow each of your individual paths to success. Utilizing the knowledge and skills you developed at Osaka University, you will become international leaders in your field in various countries and regions, contributing to the future of your country and the welfare and advancement of human society. I am proud that you who have studied at Osaka University are prepared with the disposition and determination to become authorities in the global community, and that you have a sense of responsibility and dignity necessary to move forward in society.

A danger of globalization

The world you inherit is full of diversity – different languages, customs, cultures, peoples, religions, politics and countries. Economic activity on a global scale and the resulting human exchange has brought about dramatic new challenges to our very survival. Global issues such as climate change, energy shortages, food supply and population changes, as well as infectious diseases have become more complicated.

With such interconnected causes, it would be easy to see diversity as a main factor to our world's issues. Human society is replete with examples of strife caused by diversity of peoples and religions. History is full of conflicts arising due to our differences. From that perspective, diversity may be seen as a barrier to a global society.

I do not agree with this perspective. Diversity itself is the source of a rich human spirituality, a source which is a precious factor in the development of the future. It is precisely because of diversity that humankind advances, and with it we will overcome the obstacles that stand in the way of our future. Moreover, it will allow us to continue to develop our society.

Creating harmonious diversity

I believe that in order to live in a global society, we should understand, respect and preserve diversity, and moreover actively encourage it to stimulate innovation. Only with the “creation of harmonious diversity” will humanity ensure global peace and encourage economic and societal innovation. Globalization through the creation of harmonious diversity should be our ultimate goal.

The Osaka University at which you have studied is a center of scholarship. We support research to ascertain the true essence of things and strive to cultivate individuals with the ability to do the same. With the diverse strength of a comprehensive university we offer opportunities to study in a wide variety of fields. Take for instance the study of languages. Osaka University offers a diverse mix of 25 different language majors, leading Japan in the research and education of a variety of Asian languages.

Overcoming barriers brought about by diversity is vital in the global society. Scholarship, along with art, sports, and economic exchange, is a universal human language. We have the unique ability to utilize that universal language to remove barriers to harmony. Universities impart scholarship, a universal language resulting in person to person exchange, which maintains diversity while also overcoming its inherent obstacles. Therefore in the global society of

the 21st century, I believe the new role of the university is to “create harmonious diversity through scholarship”. In this way, universities, by “creating harmonious diversity,” have and will make a profound contribution to the global society. You who have studied and researched at Osaka University will have an indispensable role in the new global society.

A mindset of sharing

How can we as individuals adjust our minds to encourage harmonious diversity? I believe that we must start by recognizing and respecting diversity, namely the importance of mutual understanding and respecting other cultures. For this, it is necessary to have the compassion and open-mindedness to put yourself in another's position and judge things from other perspectives. Coexistence and cooperation with others is important, and to do this you must know yourself and others. If you cannot answer “Who am I?” you will surely be unable to distinguish and respect others.

I believe this “mindset of sharing” is a factor that the global talent of the future must not lack. For the coexistence and co-prosperity of humankind's cultures and religions, the truth of this mindset must be understood, accepted and respected. This is the fundamental heart of the global society. First you must know yourself, love your country and understand and respect its culture. If you cannot first love yourself and your country and have pride in it, how can you respect other countries and cultures?

Much like DNA, individuals and organizations inherit knowledge based on history and early experience. When speaking of the future, I am ever mindful of the past. Starting today, you all share the common history of having studied at Osaka University. As graduates, you will be

seen by society as those with singular talents. Expectations will be high and you will have a responsibility to society. An important part of knowing yourself is being aware of Osaka University. What kind of institution is it? On this day of your graduation, I would like you to consider for a moment Osaka University's past, the history of the institution that will forever shape your future.

The origin of Osaka University: “Tekijuku”

Toward the end of the Edo period, in 1838, OGATA Koan founded a private academy named “Tekijuku,” with the goal of “helping the people of the world with the latest knowledge.” It was housed in a small building, but it had a profound impact on Japan. It was also the origin of the Osaka University from which you graduate today.

More than 1,000 students were educated at Tekijuku from all parts of the country, studying texts on Western science and technology translated to Japanese. Notable leaders from a variety of fields were educated there, including FUKUZAWA Yukichi, who founded Keio University; SANO Tsunetami, who founded the Japan Red Cross; and OTORI Keisuke, who was active as a diplomat. Graduates of Tekijuku such as these went on to modernize Japan at the beginning of the Meiji period. Their influence is still felt to this day.

Osaka University echoes the words of OGATA Koan, “For people, for society, and for the pursuit of truth.” We inherit the determination of the young scholars who studied at Tekijuku and the love of Osaka residents for scholarship.

Years after Tekijuku, locals played a key role in a transition that brought about our modern institution. Citizens calling for an “imperial

Creating harmonious diversity in a global society

2014 Osaka University Autumn Graduation Ceremony
President's Address

IV 教育/学生

IV 教育/学生



university in Osaka” lead to the founding of Osaka Imperial University in 1931. They were supported by the president of the Osaka Prefectural Medical School, KUSUMOTO Chozaburo – who later became the university’s second president – and the Osaka prefectural governor, SHIBATA Zenzaburo. The sixth imperial university in Japan, under the leadership of the first president NAGAOKA Hantaro, consisted of two schools, medicine and science. In 1933 the Osaka Technical School became the School of Engineering.

A year later, a young scholar introduced an unproven theory about the existence of subatomic particles called “mesons.” He was 27 years old, and an associate professor at Osaka Imperial University. His name was Hideki YUKAWA, and he received his doctoral degree

from Osaka Imperial University in 1938 with his theory. In 1949, he became the first Japanese Nobel Laureate with the theory he put forth for his PhD thesis at Osaka Imperial University. Later in life he wrote about his time at our university, describing “something about being here makes everyone feel like working”¹. Osaka University continues to foster the environment he described, one of open research that stimulates diligent study and exchange of ideas.

In the postwar era, with the inclusion of a School of Law and Letters, the framework of our current, comprehensive university began to take shape. Under the motto of “Live Locally, Grow Globally,” Osaka University became a national university corporation in 2004 and merged with the Osaka University of Foreign Studies in 2007. We are now a modern, comprehensive university, a representative of the quality of higher education in Japan.

Much like those who studied at Tekijuku and brought about the new age in which we live during the disorder of the closing Edo period; much like Hideki YUKAWA who, influenced by the environment here, produced world-class theoretical research; so too should you, with brilliant dreams and true determination, pave the way for a bright 21st century.

The future of humanity falls to each and every one of you. You will become leaders in your respective fields and fulfil your duty in society; you will make meaningful advances in basic or applied research. This kind of achievement is well within reach for all of you, and it is the heritage of intellectual creativity long nurtured at Osaka University.

¹ Source: *The Traveler*, the autobiography of Professor YUKAWA



The dream of Osaka University: From “Tekijuku” to “World Tekijuku”

Osaka University is approaching its centenary in 2031. Our goal is to become a World Tekijuku by this time, a worldwide top-ten comprehensive research university, and to contribute to the global society by “creating harmonious diversity through scholarship”. Osaka University is actively reforming internal organizations and systems to make this dream a reality by 2031.

Our goal is significant, and it will not be accomplished today or tomorrow. But we will focus on the current challenge, moving steadily towards our dream moment by moment, day by day. I encourage you to do the same. Never be discouraged by your distance from your dreams – focus on your current work and the dreams take care of themselves.

At the end of the Edo period, graduates of Tekijuku spread throughout the country to follow their dreams. So too must you use that which you have learned at this World Tekijuku and share your talents with the world.

“Dreams are meant to be achieved”

Believe in your dreams and live long, fruitful lives.

On this momentous day, as you take your next step from Osaka University, we wish you health, fortune and happiness.

Once again, congratulations.

September 25, 2014
Toshio HIRANO
President of Osaka University

From “Tekijuku” to the “World Tekijuku”

2014 Osaka University Autumn Entrance Ceremony President’s Address

平成26年度 秋季入学式—総長告辞



2014年10月1日(水)、大阪大学コンベンションセンターで秋季入学式が行われ、大学院148名、学部40名あわせて188名(女子68名)が大阪大学の門をくぐりました。これまで各部署ごとに行われていましたが、阪大生としての一体感、帰属意識を高めるため、平成26年度から大学全体で行うこととなりました。また、秋入学は外国人留学生が多く(135名)、国際化に対応するため、式はすべて英語で行われました。平野俊夫総長から、「大阪大学で多様な学問を学び、自分の夢と未来に向かって進んでください」と歓迎の言葉が送られました。

Good morning.

I would like to extend a warm welcome to the newest members of our community at Osaka University. I would also like to offer my sincere congratulations to your family members, relatives and friends.

With hearts full of promise and possibility, today you begin your new lives as members of Osaka University. As President of the university it is my distinct pleasure to greet and welcome you today.

Tekijuku, the origin of Osaka University

I will begin by giving you a brief overview of the history of the institution at which you will spend the coming years. Toward the end of the Edo period, in 1838, OGATA Koan founded a private academy named “Tekijuku,” with the goal of “helping the people of the world with the latest knowledge.” It was housed in a small building, but it had a profound impact on Japan. It was also the origin of the Osaka University which you enter today.

More than 1,000 students were educated at Tekijuku from all parts of the country, study-



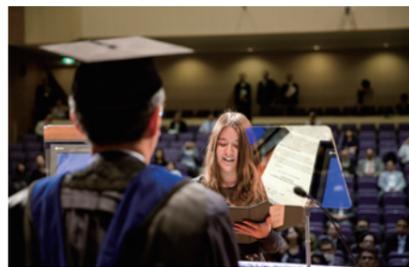
ing texts on Western science and technology translated to Japanese. Notable leaders from a variety of fields were educated there, including FUKUZAWA Yukichi, who founded Keio University; SANO Tsunetami, who founded the Japan Red Cross; and OTORI Keisuke, who was active as a diplomat. Graduates of Tekijuku such as these went on to modernize Japan at the beginning of the Meiji period. Their influence is still felt to this day.

Osaka University echoes the words of OGATA Koan, “For people, for society, and for the pursuit of truth.” We inherit the determination of the young scholars who studied at Tekijuku and the love of Osaka residents for scholarship.

Years after Tekijuku, locals played a key role in a transition that brought about our modern institution. Citizens calling for an “imperial university in Osaka” lead to the founding of Osaka Imperial University in 1931. They were supported by the president of the Osaka Prefectural Medical School, KUSUMOTO Chozaburo — who later became the university’s second president — and the Osaka prefectural governor, SHIBATA Zenzaburo. The sixth imperial university in Japan, under the leadership of the first president NAGAOKA Hantaro, consisted of two schools, medicine and science. In 1933 the Osaka Technical School became the School of Engineering.

In the postwar era, with the inclusion of a School of Law and Letters, the framework of our current, comprehensive university began to take shape. Under the motto of “Live Locally, Grow Globally,” Osaka University became a national university corporation in 2004 and merged with the Osaka University of Foreign Studies in 2007. Through the merger, we are now a modern, comprehensive university, a representative of the quality of higher education in Japan.

One of the many intellectuals influenced by our institution was a young associate professor in the early years of Osaka Imperial University. He introduced an unproven theory in 1934 about the existence of subatomic particles called “mesons.” He was 27 years old, and his



name was Hideki YUKAWA. He received his doctoral degree from Osaka Imperial University in 1938. In 1949, he became the first Japanese Nobel Laureate with the theory he put forth for his PhD thesis at Osaka Imperial University. Later in life, he wrote about his time at our university, describing “something about being here makes everyone feel like working.”¹ Osaka University continues to foster the environment he described, one of open research that stimulates diligent study and inquiry.

Last May, Osaka University’s Graduate School of Science received the actual blackboard that Professor YUKAWA regularly worked with at Columbia University in the United States. Today, the blackboard is used by students and faculty, a lasting symbol of the professor’s impact on our academic culture.

¹ Source: *The Traveler*, the autobiography of Professor YUKAWA

Shining forth into the 22nd century as World Tekijuku

Osaka University will continue to grow under its current motto, “Live Locally, Grow Globally.” We inherit a history of rigorous scholarship from Tekijuku, built 176 years ago. We have nurtured many eminent scholars, educators, and intellectuals, as well as key government and business leaders. Osaka University will celebrate the centenary of its founding in 2031. As the World Tekijuku, Osaka University aspires to become one of the world’s top 10 research universities by that time. 176 years ago, young minds were first shaped at Tekijuku from all over Japan. They spread throughout Japan with new knowledge and skills and paved the way for the new age of the Meiji Restoration. In the same way, researchers, students, and individuals with a strong passion for learning will gather together at Osaka University, the World Tekijuku, to learn and research. They will then share their talents with the world, much like their predecessors. This will be Osaka University’s contribution to global society: the creation of harmonious diversity through scholarship. I truly hope you will remember your enrollment in Osaka University in 2014, our first year as the “World Tekijuku.” You are writing a new page in the history of Osaka University with us. Let’s make our dreams come true.

My talk today is divided into three parts.

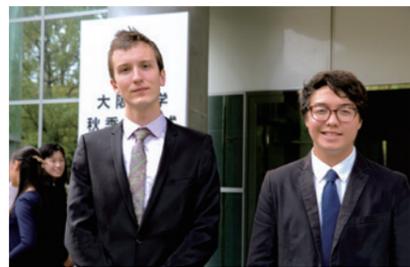
The importance of asking, “why?”

First, I invite you to consider the importance of “asking why.”

I am sure there were things you wondered about as a child, but, as you grew up, you lost interest, thinking, “That’s just the way it is.” Perhaps you wondered, “How did the universe begin?”; “Where and how did life come about?”; “Why do other countries and religions exist in the world?”; and “How do these things impact the current world situation?” There are countless questions that we cannot fully answer. Possibly we stop wondering because some questions seem too simple or common. A university is a place where you can find the answers to these questions, questions that we cannot answer with previous knowledge alone. It is a place where you uncover hidden causes, or solve the as-yet unsolvable. You and you alone are to find the answers. It is a place where you can share your doubts and find your answers. The intent of all scholarship is to ascertain the true essence of things. The place to practice scholarship is a university.

Consider the so-called “accidental” discovery of the first antibiotic. Sir Alexander Fleming, the famous biologist, devoted himself to the development of drugs for infectious diseases. It is said that one day he noticed germs were not growing near a fungus that was mixed in a culture dish by accident. Usually, researchers would consider this a fluke and dispose of the dish, but he wondered if something in the fungus might have prevented the germs from growing. He named that putative component “penicillin.” Later, Howard Walter Florey and Ernst Boris Chain read Fleming’s paper and succeeded in purifying penicillin in 1940. Fleming, Florey, and Chain won the Nobel Prize in Physiology or Medicine in 1945, and the discovery of penicillin has since saved incalculable lives worldwide.

This penicillin story is commonly framed as a chance discovery; however, I see it as a testament to the importance of keen observation and intellectual curiosity — these were the true qualities that led to this discovery. Intellectual curiosity and the questioning of common wisdom as motivators for basic research bring about the technological innovation necessary to preserve human society. It results in advances such as innovative products and state-of-the-art medical care. In addition, it plays an important role in encouraging dreams and hope in society. Though important, there is more to life than



merely having clothes to wear, food to eat, and a roof over our heads. As art enriches our hearts, basic research enriches our hopes and dreams for the future. The power of a university resides in its ability to open the way to the future and inspire people to dream. The driving force is intellectual curiosity that urges us to never stop asking, “Why?”

Ascertaining the true essence of things and moving towards the future

This brings me to my second and related point, about the necessity of “ascertaining the true essence of things and moving towards the future.”

We face an excess of global-scale changes. Modern society, rooted in material civilization and born of the industrial revolution, has radically impacted us all in return for human prosperity. We struggle with the depletion of fossil fuels and the risks of nuclear power. Environmental problems such as global warming and the spread of infectious diseases pose new challenges. Moreover, developments in medicine and improvements in the social environment have resulted in an exploding world population. In addition to food supply issues, in developed countries in particular, a rapid response to aging societies is needed.

Your task will be to perceive and adapt to these global shifts. I believe society is bettered by those who ascertain the true essence of things, the true essence hidden in complex problems; those who can take initiative in solving problems, unhindered by traditional approaches. The ability to ascertain the true essence of things is the ability to find key factors and mechanisms in perceivable phenomenon. It is for this reason that universities conduct advanced research and provide highly specialized education.

Furthermore, we must consider a shift in perspective. Relinquishing the idea of conquering nature with science and technology, we should live in harmony with the environment. Often we have conducted bioscience and medical research with the belief we somehow could sidestep unavoidable issues such as aging,



disease, and death. This outlook must change. Our goal should be to enjoy life while dealing with these diverse problems. In this way, we need to see things not from a single perspective but from many.

One of these perspectives involves the big picture. A common saying invites us to “see the woods for the trees.” This is true - doing something good for one of the trees is not always good for the forest as a whole. Even if a measure for a particular tree is optimal in the short term, ignoring long-term, big-picture effects could have lethal consequences for the forest, resulting in the loss of all the trees. Each tree depends on the forest as a whole.

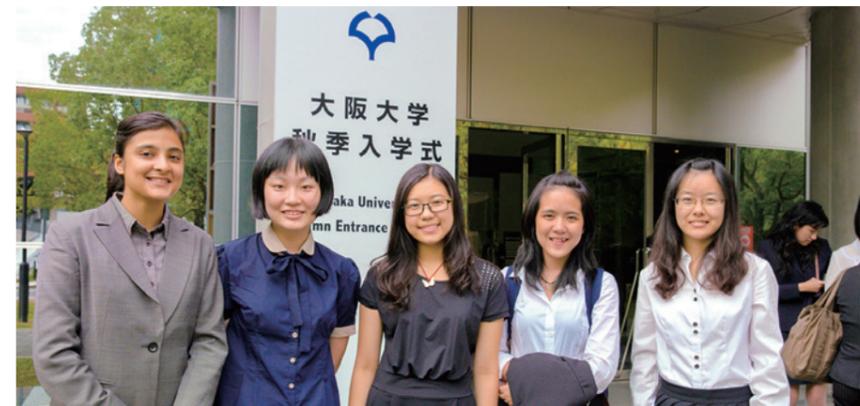
A liberal arts education promotes this manner of multifaceted thinking, as it assists students in acquiring a broad knowledge base and the flexibility to apply it in novel ways.

In the globalized world of the future, our earth will continue to be a smaller place. We will need to build relationships, cooperate and collaborate with those with a multitude of languages, cultures, religions, and nationalities. To adapt in such a global society, we must cultivate “openness,” by which I mean the ability to see things from the perspective of others. Openness and a mindset of sharing will allow us to better understand and respect our world’s cultures and philosophies.

Creating harmonious diversity through scholarship

Third, I believe that this openness is nurtured at universities, through the universal language of scholarship.

Diversity has been a driving force in the development and enrichment of human society; still, human society is replete with examples of strife caused due to differences between peoples and religions. The scholarship at universities, a kind of language common to all humankind, has the power to overcome such discord. Much like art and sports, academic scholarship facilitates communication and mutual understanding. Scholarship is a means of international friendship, a way in which we can expand our circle



ever outward. In the community of the university, bonds formed with those from different backgrounds develop over time to bring more harmony to society.

Universities must strive to contribute to a new community where people live in harmony despite their differences. The scholarship at universities can act as a universal language and usher in an era of a harmonious global community. I believe this is the mission of universities in the 21st century. In this way, universities must take initiative in creating and contributing to a multicultural society.

This is why I urge you to travel abroad and interact with people in different countries, and why Osaka University is proud to offer a variety of programs for that very purpose. I hope you take steps into our global society and exercise your fluency in the universal language of scholarship. Make the most of these opportunities to do your part in bringing about an era of harmonious diversity in our global society. That is your vital role in the 21st century.

Reaching the top of a mountain

Finally, a personal life lesson I would like to share.

You are now at the summit of a massive mountain, your admission to Osaka University. What are you thinking having conquered this mountain? Whenever I talk with students or young people, I stress the value of reaching the top of the mountains we climb in life.

We do not know how high the mountains in our lives are before we find ourselves at the peak. What matters is that from this new vantage point we can see wider and further than before, regardless of the height of the mountain. Here, we look back on the path which led us and forward to the mountain that awaits us next. We may not see signs as we climb the mountains in our lives. Nobody knows how far they

are up the mountain — whether they are only halfway there or nearly at the top. But once we make it to the peak, then and only then do we know that we have reached it. The top of the mountain suddenly unfolds before those who have persistently believed and made the effort — much like the discovery of penicillin by Sir Fleming, 86 years ago.

I am sure that now you feel the joy and momentousness of your achievement atop this mountain as you survey the view stretching out before you — the future. I hope you will make the effort to climb new mountains one after another, reaching every summit you choose.

Dreams are for achieving

I believe your future holds infinite possibilities. Today is an exciting day — hold on to this excitement and make your dreams come true. At the 100th anniversary of Osaka University’s founding in 2031, you will have inherited the world. I hope you make every effort to achieve our great dream to make Osaka University one of the top ten research universities as the World Tekijuku. Achieving dreams is difficult, and that is why they are called dreams. A dream is not reality and cannot be achieved easily. So it is only too easy to think that achieving dreams is impossible and, thus, give up. If we hold on to our dreams and continue to make every effort to achieve them, one day, those dreams will come true.

Remember “Dreams are meant to be achieved.”

Allow me to close by wishing you all good fortune, and once again, congratulations and welcome to Osaka University.

October 1, 2014
Toshio HIRANO
President of Osaka University



研究の原動力は 知的好奇心だ

物事の本質を見極め、世界に羽ばたく

平野俊夫総長は就任以来、基盤研究重視の方向を打ち出し、「22世紀にも輝き続ける大学」を目指している。それを可能にするのは、いま勉学・研究にいそしんでいる一人ひとりが知的好奇心を追求し、物事の本質に迫ることだという。平野総長を囲んで、大学院生たちが研究の面白さ、研究者の生き方などを話し合った。

▶総長と学生との対話

平野 俊夫 大阪大学総長

廣部 祥子 薬学部 6年生

伊與田 宗慶 工学研究科博士後期課程
マテリアル生産科学専攻 1年生

樋口 騰迪 文学研究科博士前期課程
文化表現論専攻(音楽学) 2年生

大阪大学を選んだ理由は？

平野 今日大阪大学で学び研究している皆さんに、日ごろ感じ、考えていることを語ってもらいます。まずは自己紹介から。
伊與田 僕は工学研究科マテリアル生産科学専攻に所属し、簡単に言うと金属をくっつける溶接の研究をしています。構造化デザイン講座プロセスメカニクス領域で、特に自動車

のボディーなどの抵抗スポット溶接という、点でくっつけていく溶接の強度について研究しています。

僕の場合は、5年制の工業高等専門学校から大阪大学の3年次への編入学です。明石高専には大阪大学出身の先生がいらっやっやって、親しみやすく面白い方々だったので、こういう先生になれたらいいなと思いました。

廣部 私は生物が好きで、総合大学の医療系を志望していました。母が薬剤師ということもあって薬学部に入りましたが、高校の担任の先生が大阪大学の理学部出身で、やっぱり面白い方でした。

私は、薬学部が6年制と4年制に分かれてからの第1期生です。現在6年生で、医学部の先生にご協力いただいて「貼るワクチン」の臨床研究に携わっています。「皮膚内溶解型マイクロニードル」という細かい針を有するものと、湿布状の「親水性ゲルパッチ」の2種類に関して、ヒトにおける安全性を確かめるための臨床研究を進めています。今は研究が面白くて、薬剤師の仕事をする気はなくなりました。いちばん好きな学問領域が免疫ですので、今日は平野先生にお会いできて光栄というか、緊張しています。

樋口 僕が大阪大学に決めた理由ははっきりしていて、4年制の総合大学で音楽学の講座があるのは大阪大学だけだったからです。今、文学研究科文化表現論専攻で、主に19世紀末から1930年代ぐらいまでのフランス音楽を研究しています。また、当時の音楽が日本にどう入ってきたか、それを日本人がどう受け入れて展開していったか、大正から1960年代あたりの音楽から見た文化史を含めて明らかにしたいと思っています。

平野 私はクラシック音楽やオペラが好きなのですが、20世紀初頭のフランス音楽といえば、例えば作曲家では？

樋口 ポピュラーなのはラヴェルやフォーレですが、僕はヴァンサン・ダンディや「フランス6人組」と呼ばれるグループなど、ちょっとマニアックな音楽が好きです。フランスに留学してダンディに学んだ高木東六に注目して修士論文を書いています。

平野 ほう。実際に音楽学を専攻していて、総合大学で学ぶメリットを感じていますか。

樋口 芸大や音楽大学など単科大学で音楽学を学ぶよりも、美学や哲学、西洋史や東洋史、文学などと横のつながりを持ちながら追

究できることに大きな意義があると思います。学会などで発表を聴いても、総合大学で音楽を考えるほうが、研究のスケールが大きいというか、他の専門分野の人にも刺激を与えられるような研究になり得るのではないかと感じています。

授業が面白くて目からウロコ

平野 大学院で研究に熱中するのは当然ですが、学部生時代に印象的な授業がありましたか。

伊與田 僕は編入学でしたから、すぐに専門の授業が始まりました。高専では溶接の工場実習を経験しましたが、大学では一口に溶接といっても、力学的な強度や材質の変化、プラズマの現象など、研究分野がそれぞれ奥が深く、とにかく授業が面白くて、こんなこともあるんだと驚きの連続でした。

溶接は、建物、自動車など、身の回りにいっぱい使われています。先生が実例を挙げてくださって、ここはうちが携わっているとか、研究したことが応用されているとかいう話を聞いたときに、すごくかっこいいなと思いました。ある意味でものすごくダサイものが、ものすごくかっこよくなり、まさに目からウロコでした。溶接に対して誇りを持つようになり、最近は街を歩いても溶接を見ると、ああきれいだなあと、見とれてしまうほどマニアになっています。

平野 大阪大学にはその分野でトップレベルの接合科学研究所がありますし、最近は構造物の耐震の面からも注目されていますね。廣部さんと樋口さんは、専門以外の授業も受けたのでしょうか。

廣部 大学に入り、研究分野の多さ、学問の多さにびっくりしました。宇宙を対象にしても、宇宙空間の話だったり、微小な物理学的な話だったり、宇宙の中の生命体の話だったり。総合大学でいろんな先生に出会えたのはよかったと思います。

「THE CELL」という細胞生物学の分厚い教科書の奥の深さも衝撃的でした。問題を解けば解答が得られた高校までの授業から一転して、何か奥が深くよく分からないけれど、自分の生体で起こっていることが書いてある。それもまたショックでした。

樋口 専門である音楽学の講義以外では1年生の後期にドイツ文学の入門的な授業で、カフカを研究されている三谷研爾先生が、ドイツの文学・文化が世界や日本でどういう展開

総長
X
学生
対話

総長 × 学生 対話

をしたのか、熱狂的な口調で話されたのが印象的でした。ドイツ文学が好きなのが好きなことを好きなように、しかも学問的な体系に基づいてアウトプットしたらこうなるのかと思いました。

僕はずっと音楽が好きで、自分なりに音楽を聴いたり本を読んだりしてきたのですが、音楽学という学問がいったいどういうものなのかイメージできていませんでした。2年生になって伊東信宏先生、現在名誉教授の根岸一美先生の授業を受けたとき、音楽学とはこういう学問なのかと目を開かせていただきました。

常に知的好奇心を持って挑戦

平野 研究していて感じる喜びや難しさを、もっと聞かせてください。

伊與田 溶接もそうですが、ものづくりは職人さんの勘に頼っている部分があり、現場における溶接作業や、製品化への応用は企業の方にはかまいません。では大学では何ができるかということになります。僕は、溶接のメカニズムを明らかにする基礎研究が大事だと思っています。

自分の研究テーマである抵抗スポット溶接をみても、どんどん鉄の品質が上がって高強度化が求められているなかで、今までと同じような評価指標でよいのか、もう一度見直したい。そういう基礎研究となると、何か自分でゼロから生み出さないといけない、新しい考え方を示さないといけないと頭を悩ましているところです。ドクターの3年間で自分が新たな指標を完全に作り上げられなくても、その種を作りたいと思っています。

ドクター1年生が何を言っているのだと思われられるかもしれませんが、実験していると、なるほどということが少しずつ出てくる場合があります。うまくいかないことが多いのですが、いい結果が出たときはガッツポーズですね。学会などでデータを出したときに海外の人からも面白いと言われるとうれしくて、もっと何か分からないかと考える、そういうことの積み重ねですね。



伊與田さん

平野 伊與田君の言うとおりだと思います。人の知らないこと、分かっていないことを明らかにするのが、学問、研究です。君は研究者としての経験は浅いかもしれないけれど、ノーベル賞を受賞した人でもそれは同じで、何か一つ分かったらまた次の分からないことに挑戦します。学問に終わりはありません。常に知的好奇心を持ち続けて、パズルを解くようなものです。

私の場合は生命科学だから、何か新しいものを創るというのではなくて、人間もあらゆる生物も存在し、生命活動を営んでおり、既に仕組みが作動しているわけです。生命科学はそこに潜んでいるメカニズムを明らかにしようとするが、その過程で知的好奇心が大切であることや、そこにロマンがあることでは他の学問と共通です。

点を線でつなぎ言語化したい

廣部 ワクチン抗原を新しい製剤として開発するのが、私のメインの研究ですので、新しいものづくりと基礎研究の二つが重なっています。結果が間近に見られて、抗体価が上がったときは、その瞬間に先生のところへプレートを持ってダッシュし、「出ました、出ました」と報告すると、先生がにこにこして「やった、やった」と(笑)。そういう喜びは、何ものにも代えられません。

一方、皮膚でどのような免疫反応が起こっているのか、私たちの製剤でどうなるかという



廣部さん

ことも含めて、もっと解明していかなければなりません。免疫学に関するさまざまな因子がどんどん発見されている現在、私に何ができるのか、何を見いだせるのか、そのために基礎の勉強をどれだけしなければならないかも分かりませんが、乗り越えていきたいところです。

樋口 音楽学に限らず、人文科学には共通の性格だと思うのですが、ダイレクトに即効性を持って世の中の役に立っているわけではありません。しかし、音楽が嫌いという人はあまりいないなかで、専門家として何をしなければいけないのかを考えています。

そこで、人々が興味のある「点」を我々が「線」でつなぐことができなにかと思っています。例えば、ベートーヴェンの「運命」の「ダダダーン」というモチーフ。あれは200年以上たっても、今日の作曲家にも影響を及ぼしている部分があるわけです。漠然と浮かび上がっているものを我々が線でつないで言語化していく作業が面白い。ただ音楽を言葉で語ることの限界は、どうしても付きまといま。言葉にしまったときにこぼれ落ちていくものがあっても、感覚的に感じ取っているものを代弁していくというのが専門家の役目かと思います。

本質に迫る研究で社会に貢献

平野 どの分野であれ、研究者は知的好奇心に生きる者です。ただそれだけでなく、物事の本質をつくこと、本質に迫ることが大事で



樋口さん

す。何か一つの本質につき当たって、自分が明らかにしたことをジェネライズし、いろんな現象が説明できるようなものにつながったら、それは社会的な広がりのある大きな研究になります。そういうことを伝えたくて、私の研究室のホームページには、「物事の本質を見極め、世界に羽ばたく」という標語を掲げ続けています。

ここで、皆さんの将来の希望や目標を聞かせてください。

廣部 薬剤師の仕事を通じて患者さんのお役に立てると思っていたのですが、社会に貢献する薬に関する研究の大切さを実感できました。製剤開発から基礎研究までかわらせてもらって、研究に喜びを感じ、大学院で研究を続けることにしました。

6年制だから学べたことが多くあり、附属病院や薬局での臨床実習も、研究室にこもるような基礎研究も経験しました。それを社会に還元し、大阪大学の薬学部の6年制がいかにか充実しているかを伝えていきたいと思っています。

伊與田 僕は工学研究科ですので、最終的にはエンジニアリングにしていかなければいけないと考えています。ただし、企業と共同研究をする場合、企業からこういうことをやってください、分かりました、やりました、というのでは、大学で研究する意味がないと思っています。偉そうなこと言っていますが、大学の研究で何ができるのかというと、やっぱり先生が



平野総長

おっしゃったように本質をつきつめて、そこから面白い種を作り、種をまいていくことが大事なんじゃないでしょうか。本質をついた研究成果を発表することで、企業とつながり、さらに企業と企業がつながり、溶接が鉄と鉄をつなげるように、人と人をつなげてどんどんネットワークを広げていきたいと思っています。

溶接の強度がそんなに強くなくても、くっついているからいい、建っているからいい、という考え方があるのも事実です。それでも、物事の真理をつくことでそういう考え方をちょっとずつでも変えていけなかなあと思いがながら、大学に残って研究しています。

知的好奇心とロマンを追求

平野 私が思っていることを、すべて言ってくれましたね(笑)。大学の本来の使命は基盤研究にあり、そこから10年先20年先50年先の産学連携につながるようなことをやっているのは、ロマンを追求するだけでなく、それはまさに大学の社会貢献の一つです。

社会貢献という意味では、工学部や医歯薬系は、製品化や病気の治療を通じて出口は社会につながっています。しかし、理学部や文学部などは社会との接点が見えにくいのですが、人間は衣食住が足りるだけで心が満たされるものではありません。知的好奇心を追求し、ロマンを追い求めるのが人間です。基盤研究には、将来の応用研究や産学連携につながる面とともに、ロマンを追求し社会に発

学問に終わりはありません。
常に知的好奇心を持ち続けて、
パズルを解くようなものです。

信する、世の中に夢を与えるという面もあります。

樋口 平野先生がおっしゃったように、また「人はパンだけで生きるものではない」と聖書にあるように、パン以外のものを世の中に生み出していくことは、大学の大きな役割だと思うのです。もちろん、パンを提供することは本当に大事なんです。

僕は将来、専門的な音楽学の研究だけでなく、音楽批評を書いたりしていくつもりですが、それを読んで面白いと思っていただけたらいいし、こいつはアホかと徹底的に批判されてもいいのです。批判する過程でその人の中に気づきや新たな理論が生まれてくると思いますから。もし、僕が本質をつけたら、その本質を土台にして何か違うところに思考を働かせて応用していってもらえるかもしれません。受け取る人がさらに豊かに発想を広げていけるようなものを提供できたらいいのかなあと思っています。

平野 皆さんの話を聞いて、大阪大学の学生さんは素晴らしいと再認識するとともに、大阪大学の輝く未来を確信しました。学生の皆さんをはじめ一人ひとりの大学構成員の皆さんと力を合わせて、22世紀にも大阪大学が輝き続ける基盤を築いて行きたいと思っています。最後に、私がよく学生の皆さんに言っているこの言葉で締めくくりたいと思います。私になくて君たちにあるものは、未来という無限の可能性です。

阪大 なでしこ



官民協働海外留学支援制度～トビタテ! 留学JAPAN 日本代表プログラム～ 大阪大学から7人が留学

女子7人は阪大の元気象徴

総長 「トビタテ! 留学JAPAN日本代表プログラム」の最終選考を勝ち抜いたのは、全員女性なのですね(笑)。阪大の女子学生は本当にたくましいと思います。皆さんは阪大の代表、日本の代表として世界にチャレンジされるわけで、大いに期待しています。今日は留学に関する目標や今後の夢などをうかがいたいと思います。簡単な自己紹介からお願いします。

相川恵梨子 医学部5年です。「自然科学系、複合・融合系人材コース」で採用されました。英国のキングス・カレッジ・ロンドンに来年1月から3か月間留学し、附属病院遺伝子皮膚病グループで実践を学ぶ予定です。春休みとクリニカルクラークシップ(臨床参加型実習)の期間を利用して、留学します。

齊藤小夏 外国語学部3年、ビルマ語専攻です。「新興国コース」で今年12月から10か月間、ミャンマーのヤンゴン外国語大学ビルマ語学科に語学留学します。

平野美優 外国語学部3年、ロシア語専攻です。私も「新興国コース」で、8月から12か月間、ロシアのサンクトペテルブルク大学ジャーナリズム・マスコミュニケーション学部で留学します。その後ウズベキスタンで、日本語教育など草の根交流を行っている「リシタンジャパンセンター」での1か月間のボランティアに携わる予定です。

森裕美 外国語学部3年、英語専攻です。「世界トップレベル大学等コース」で、9月から9か月間、米国・カリフォルニア大学サンタバーバラ校・教養学部コミュニケーション学科で、交換



世界に チャレンジ

留学生として学ばせていただきます。
対馬ひとみ 法学部3年、国際公共政策学科に所属します。私も「世界トップレベル大学等コース」で、9月から8か月間、カナダのマックマスター大学・社会科学部に交換留学させていただきます。

中嶋沙蘭 同じく法学部3年、国際公共政策学科です。「多様性人材コース」で、来年1月から1年間、米国・ジョージア大学・国際関係学部もしくはテキサスA&M大学国際関係学部で交換留学生として学ぶ予定です。

北岡志織 文学研究科修士2年、文化動態論専攻です。外国語学部出身でドイツ語を専攻していました。「多様性人材コース」で、9月から11か月間、ドイツのハンブルク大学・人文科学研究科ドイツ文学専攻に所属しながら、Bluespots Productionsという演劇カンパニーでインターンとして働きます。

留学で何を学ぶか

総長 阪大の原点は、緒方洪庵の適塾です。そして今、世界から人を集め交流する「世界適塾」の実現と、学問による調和ある多様性の創造をめざしています。皆さんも今回のチャレンジで、きっとそのような体験ができるものと信じています。留学に向けて皆さんは、どのような夢を持っていますか。

相川 MD研究者育成プログラム(未来の医療を切り開く医学研究者を育成する)に所属しています。キングス・カレッジ・ロンドンを選んだのは、病院と研究所、医師と医師以外の研究者が一体で活動しているという先進的な研究・治療システムを、ぜひ見学したいと思ったからです。

日本人学生の海外留学の後押しのため、今年度から、官民協働海外留学支援制度～トビタテ! 留学JAPAN日本代表プログラム～がスタートした。多様な活動の認定と返還不要で従来の2倍の金額の奨学金、事前・事後研修、留学生ネットワークなど手厚いサポートが大きな特徴だ。第1期の募集には全国から221校・1700人の学生が応募。全国で323人、阪大からは7人の女子学生が選ばれた。平野俊夫総長が世界にチャレンジする「阪大なでしこ」たちを激励した。

- 法学部 国際公共政策学科3年 **中嶋沙蘭** U.S.A.
- 文学研究科 文化動態論専攻修士2年 **北岡志織** Germany
- 外国語学部外国語学科 ビルマ語専攻3年 **齊藤小夏** Myanmar
- 医学部医学科5年 **相川恵梨子** England
- 法学部 国際公共政策学科3年 **対馬ひとみ** Canada
- 外国語学部外国語学科 英語専攻3年 **森裕美** U.S.A.
- 外国語学部外国語学科 ロシア語専攻3年 **平野美優** Russia





相川恵梨子さん 平野美優さん 齊藤小夏さん 森 裕美さん 北岡志織さん 平野俊夫総長

齊藤 ビルマ語専攻なので、ミャンマーで学ぶことによって、しっかりとビルマ語を話せるようになりたいと思いました。またミャンマーは、軍事政権による民主化が図られているようですが、現在どのような状況なのかを自分の目で確かめたいです。私のビルマ名(ビルマ語専攻の学生はビルマ名を授与される)は「スーチー・シエ」なので、アウンサンスーチーさんにも会えたらうれしいです(笑)。アジアが好きなので、将来は東南アジアに関わるような仕事ができればと考えています。

平野 サンクトペテルブルク大学でジャーナリズムを学ぶのは、もともと国際協力に興味があり、途上国などでは市民の声が政府に届いていないことに注目したからです。アルバイトをして毎年海外に出かけていて、これまでにイギリスやバングラデシュにも行きました。今回の留学先としてロシアを選んだのは、中央アジアやチェチェン紛争に興味があったからです。

森 コミュニケーションについて学べる留学先を探しました。阪大の外国語学部でもコミュニケーション関連の科目はありますが、私は今、カリフォルニア大学からの留学生のサポーターをしていて、彼らのエネルギーに圧倒されています。そのようなエネルギーな大学に身を置いて勉強し、将来は自分の学んだことを大学や社会に還元できればと思っています。

対馬 主に国際関係に興味があり、国際公共政策学科でも紛争などについて学んでいる。カナダでは「平和学」を中心に勉強したいと思っています。カナダは「人種のモザイク」と言われるように移民が多く、多様な意見や考えが存在する国。そのような国の大学で、広い視野を持って平和学を学べたらと思っています。

中嶋 高校生の時(2010年)、エジプトのカイロで開催された「平和の祭典アートマイル MURAMID 展」に日本ユースとして派遣され、楽しく魅了されました。今ゼミなどで地域紛争について学んでいますが、将来はパレスチナなど中東の平和構築に貢献したいと思っています。



中嶋沙蘭さん 対馬ひとみさん

ます。そのためにも、中東に影響を持つアメリカの大学で、アメリカの外交政策について学びたいと考えました。

北岡 ドイツ語をツールとして自分にできることを考えた結果、ドイツ現代演劇を研究しておられる市川明先生の演劇学研究室に入り、演劇の理論と実践を学びました。また今年2月、ドイツのアウグスブルクで行われた国際的マルチメディア演劇プロジェクトに参加し、字幕やドイツ・アメリカ・日本(阪大)の3劇団のアテンドスタッフを務めました。現代劇と能を融合させた市川先生演出の作品は高く評価され、その時、演劇を通して文化交流ができるのではと感じ、ドイツの大学で学びながら演劇カンパニーで研修しようと思いました。

阪大生はもっと異文化体験を

総長 皆さんしっかりしていて、非常に頼もしいですね。今回の留学以前にも海外経験が豊富ですし、皆さんのような学生がいれば、阪大は必ず世界トップ10になれると感じます。ところで皆さんは、なぜ「トビタテ!留学JAPAN」に応募しようと思ったのですか。阪大生がもっと多く留学するためには、どうすればよいと思いますか?

森 「トビタテ!留学JAPAN」の1期生ということで、何か新しいことができるのではないかといい思いがありました。それに奨学金など金銭的なサポートも大きな魅力でした。

齊藤 外国語学部の学生は、留学への意欲が強いのが特徴です。キャンパスや学部を超えたつながりがあれば、男子学生を含むもっと

皆さんからは自分の夢を自分でつかみ取り実現するエネルギーを感じました

多くの学生が応募するのではないのでしょうか。
北岡 今回の応募にあたり、文学部の国際連携室に毎週のように通い、すごくお世話になりました。親身になってサポートしてくださる職員の皆さんがいて、経済的にも手厚いサポートがあるのに、この留学制度を利用しないのはもったいないと思います。そういうサポートがあることをもっと知ってもらえたらと思います。留学には不安もありますが、得られるものの大きさを考えるとワクワクします。

夢を自分でつかみ取る

総長 皆さん、留学に対する本気度が違いますね。阪大のキャンパスにいても多様な知識は得られますが、「百聞は一見に如かず」。海外に行き、こういう考え方があるのか、こういうことが世の中にあるのかという異なる視点を得ることはとても大事です。将来どのような分野に進むにしても、いろいろな見方を知ったうえで、これが正しいという本質を見極めてほしい。それは、皆さんの将来にとっても次世代の社会にも大切です。不可能と思われることも、挑戦し続けていると必ず現実になります。皆さんからは、自分の夢を自分でつかみ取り実現するエネルギーを感じました。頑張ってください。

第2期生の募集が10月初旬に行われる予定です。次回は阪大の男子学生も大勢応募して採用されるよう、ぜひ皆さん、どうすれば採用されるかというメソッドを含めて、大いに他の学生にも宣伝してください。

全員 今日はありがとうございました。



応援団から阪大なでしこたちにエールが送られました

夢は叶えるためにある。



Gagus Ketut Sunnardiantoさん

Sastia Prama Putri助教

インドネシアと日本—— 互いの文化をリスペクトし 調和ある多様性の創造に取り組む

大阪大学の学生と教職員が、学問による「調和ある多様性を創造」することに努力しているなか、7月7日(火)、Sastia Prama Putri助教(工学研究科)とGagus Ketut Sunnardiantoさん(基礎工学研究科博士後期課程2年)が平野俊夫総長を訪ね、お二人の今までの取り組みについて、平野総長と3人で懇談が行われました。日本の高等教育を海外(特に母国のインドネシア)で推進するなど、その取り組みについてお二人に語っていただきました。

Putri助教は現在、工学研究科 福岡ラボで研究を行っています。アジア人材育成のための領域横断国際研究教育拠点形成事業(CAREN)のメンバーでもあり、どちらも日々努力しています。さらに、CARENのメンバーとして、インドネシアの中でトップクラスの大学と言われているバンドン工科大学生命科学技術学術研究科(ITB, インドネシア)と大阪大学との

ダブル・ディグリー・プログラムを設立させることに貢献しました。

元大阪奈良地域インドネシア学生協会長のSunnardiantoさんは現在、Taiyo no Indonesia Foundationの会長として日々努力しています。Taiyo no Indonesia Foundation(たいようのインドネシア・ファンデーション)とは、インドネシアの遠隔地の学校に学資援助や優れた高校生に



英語版

インドネシア語版

奨学金を提供する協会です。そのために、近頃、Sunnardiantoさんが19人のインドネシア人の学生や卒業生から日本でのサクセス・ストーリーを編集し、「Living the Dream in the Land of Sakura: Anthology of Inspirational Stories」という本を英語とインドネシア語の2ヶ国語で出版しました。この本は現在、インドネシアで発売されていて、この本の売り上げのすべてがTaiyo

Dreams are meant to be achieved.

no Indonesia Foundationを通じて、インドネシアの恵まれない学生たちに提供されます。これまで、Taiyo no Indonesia Foundationがサポートした小学生は約100人で、1年間の奨学金が提供された中学生や高校生は25人近くいます。

お二人に今までの取り組みをご紹介いただいた後、いろんなテーマについて3人が語り合いました。将来の夢は何かと聞かれたPutri助教、「阪大で勉強をするという、最初の夢はもう叶いましたので、次は阪大の正式教員になる夢を叶えることに努力しています」。Putri助教と阪大との関わりも、10年以上前からのもので、学生としても、職員としても、そしてCARENのメンバーとしても、非常に長いです。インドネシアの大学や研究機関の一員になって、インドネシアの人々に教育を推進することがSunnardiantoさんの夢です。お二人の夢を聞いた平野総長は「夢は叶えるためにある。叶わなければ、夢は変わらず夢のままである。だが、夢が叶うまでのプロセスも大事だ。人生を充実させるものである」と、その夢が人生に必要なものだと思いました。

世界が狭くなり、その結果、暮らす多様な人々がお互い接する機会が多くなりました。かつて遠く離れていた人類の多様性が集約されつつある情報化時代の今、お互い相手の文化をリスペクトすることが今までよりも必要であるという点で3人の意見が一致しました。Putri助教が属している研究所では、ほとんどのラボが現在English Onlyになっているそうです。特にPutri助教の授業では、英語での議論などが行われていて、まさに多様な学生たちがポジティブに語り合える場づくりを行っています。Taiyo no Indonesia Foundationの第一作目の成功につづき、Sunnardiantoさんは、現在第二作目を考えているとのこと。次の作品ももちろん、日本の高等教育を推進することや、インドネシアの人々を援助することに貢献するでしょう。

最後に、平野総長が再び、大阪大学の一つの目標であり、そして人類の生存に必要な要素である「調和ある多様性を創造」することに貢献するPutri助教とSunnardiantoさんの今までの取り組みを称賛しました。これからのお二人のご活躍が一層期待できるに違いありません。

Promoting Japanese Education and Research Abroad for Indonesian Students

In a world of increasing globalization, Osaka University students, faculty, and staff are hard at work in their efforts to promote harmonious diversity through scholarship. Assistant Professor Sastia Prama Putri of the Graduate School of Engineering and 2nd year Ph.D. student Gagus Ketut Sunnardianto of the Graduate School of Engineering Science met with Osaka University President Toshio HIRANO to talk about their individual efforts in promoting education in Japan overseas, specifically in their home country of Indonesia.

Dr. Putri, currently an assistant professor in the Fukusaki Laboratory of the Graduate School of Engineering at Osaka University, is also a member of the Center for the Advancement of Research and Education Exchange Networks in Asia (CAREN). She contributed to the establishment of the double-degree program between Osaka University and Institut Teknologi Bandung (ITB), a top university in Indonesia, through her work at CAREN.

Mr. Sunnardianto, former president of the Indonesian Student Association of Osaka-Nara, is currently serving as the president of Taiyo no Indonesia Foundation, an organization which offers aid to schools in remote areas of Indonesia, as well as scholarships for outstanding high school students who would not otherwise be able to pursue further education after graduation. Recently, Mr. Sunnardianto has compiled the stories of 19 OU students and alumni from Indonesia into a book entitled Living the Dream in the Land of Sakura: Anthology of Inspirational Stories of Studying in Japan (Indonesian: Menghidupkan Mimpi ke Negeri Sakura). This book, currently available in Indonesian bookstores, features success stories of Indonesian students studying in Japan, and will serve as an inspiration to those Indonesian students looking to study abroad in Japan. All proceeds from this book will go towards the efforts of the Taiyo no Indonesia Foundation to support underprivileged Indonesian students. Through sales of this book, the Taiyo no Indonesia Organization has helped nearly 100 elementary school students by buying school supplies such as bags and shoes, as well as providing over 25 junior high school and

high school students with one-year scholarships.

After their introductions, Dr. Putri and Mr. Sunnardianto had a conversation with President HIRANO on a variety of topics. When asked about their dreams, Dr. Putri mentioned that her original dream of studying at OU had already been achieved, and that she has moved on to her next dream of becoming a faculty member at OU. Dr. Putri has been affiliated with Osaka University for over 10 years, either as a student or in her current role as researcher and CAREN member. As for Mr. Sunnardianto, he dreams of promoting education abroad to Indonesian students through taking a position at an Indonesian university or research facility. President HIRANO was impressed by the efforts of Dr. Putri and Mr. Sunnardianto in promoting Japanese education abroad, and gave some inspiring advice to the two of them on what is to come: “Dreams are meant to be achieved. If we don’t achieve our dreams, they will stay dreams forever.”

He added, “But the process [of achieving those dreams] is great. It will make your life very fruitful.” He went on to mention that those dreams are vital to our lives.

The world around us is slowly becoming smaller and, as a result, people are becoming closer. In the age of the internet, the once isolated diversity of the human race is now being heavily concentrated, and the three agreed that mutual respect for different cultures has become more important than ever. Dr. Putri mentioned that many of the laboratories in her department have made the switch to an all English environment, and that in her own class, she has been holding debate sessions in English, further lending to positive and open communication between students of different cultures and backgrounds. Mr. Sunnardianto, following the success of Taiyo no Indonesia Organization’s first book, is currently in the planning stage of a second book, which will continue to promote study and life in Japan while helping those in need in Indonesia. President HIRANO praised Mr. Sunnardianto and Dr. Putri for their actions in “promoting harmonious diversity through scholarship,” one of the pillars of Osaka University, and a vital component in the survival of humankind. Osaka University will continue to support this kind of mutual respect between different cultures in the hopes that more faculty, staff, and students will follow in the footsteps of Mr. Sunnardianto and Dr. Putri in their efforts of promoting education both in Japan and overseas.



Further education after graduation. Recently, Mr. Sunnardianto has compiled the stories of 19 OU students and alumni from Indonesia into a book entitled Living the Dream in the Land of Sakura: Anthology of Inspirational Stories of Studying in Japan (Indonesian: Menghidupkan Mimpi ke Negeri Sakura). This book, currently available in Indonesian bookstores, features success stories of Indonesian students studying in Japan, and will serve as an inspiration to those Indonesian students looking to study abroad in Japan. All proceeds from this book will go towards the efforts of the Taiyo no Indonesia Foundation to support underprivileged Indonesian students. Through sales of this book, the Taiyo no Indonesia Organization has helped nearly 100 elementary school students by buying school supplies such as bags and shoes, as well as providing over 25 junior high school and



命にはたくさんの奇跡が重なっていて、とても価値のある素晴らしいことだと改めて感じた。

今回の講演を聞いて、きつくても自分が進みたいと思った道なら頑張れると思った。

「今を生きる大切さ」を学べた。看護師になるという夢を叶えるために、一瞬を大切にしながら努力していきたいと思った。

講演後の
高校生の感想

限られた人生の中で自分の学びたいことに向かって努力することが最も大切だと思った。「目の前の山を登り切る」ことで将来やりたいことも見えてくることがわかった。

「自分のこれからの人生の中で、今が一番若い自分」という言葉がとても心に響いた。

今の一瞬をどう過ごすかが大切であり、山を登り切ったときの景色を望める日が来るの楽しみにしたいと思った。

祖先の行動が少しでも違えば現在の自分はいない、という内容の話がとても心に残った。

「夢」をあきらめず、最後まで、その夢がかなうまで人生の瞬間瞬間を大切に一生懸命生きていくという強い意志を抱いた。今回の講演を聞いていろんなことに対してやる気が湧いた。

「人は日々変化する、未来は無限の可能性がある」という言葉は、僕に勇気を与えてくれた。

絶対に無理だとあきらめていたことがあったが、挑戦してみようという気になった。

「一瞬をどう生きるか」が大切だと知った。自分のやりたいことに向かって一つ一つ進んでいきたいと思う。

医学と「いのち」をテーマに 高校生に熱い講義

動画 大阪府立豊中高校特別講演『医学と「いのち」』(2015.7.8)
youtu.be/kgL6FKn2TRU

平野総長が高校生に語る
本学と大阪府教育委員会や進学指導特色校(GLHS:グローバル・リーダーズハイスクール)の指定を受けている10校との連携事業の一環として、大阪大学の魅力、学問や研究のおもしろさを高校生に伝えるため、総長をはじめ理事・副学長が各校を訪問し、講演や懇談会など対話による高大連携活動を行っています。平野俊夫総長も母校の天王寺高等学校をはじめ、GLHS・6校、私立清教学園高等学校に特別講義を計8回実施し、学問の楽しさ、研究の面白さとともに、大阪大学の魅力を高校生に伝えました。



2012年4月20日
大阪府立天王寺高等学校

2012年10月19日
大阪府立三国丘高等学校

目の前の山を登りきる。最高学府の長として、また、少し長く生きる人生の先輩として、このメッセージを未来ある高校生に伝えるべく、平野総長が大阪府立三国丘高等学校を訪問しました。

講演では、大阪大学の歴史、総長自身の専門である免疫学や、医工連携等による最新医学研究に触れながら、「命の大切さ」と「いかに生きるか?」を主題とし、総長自身の信念である「目の前の山を登りきる」ことの大切さについて力を込めて語りました。

講演後、医歯薬系への進学希望者を対象に懇談会が開かれ、そこでは進路選択に悩む生徒や研究に興味を示す生徒から質問が複数寄せられました。

懇談会の終わりには、「自分が今ベストだと思ったこと、目の前のことに真面目に一生懸命頑張るしかない。難しく考えないで、自分の

可能性を狭めるようなことはせず、幅広い分野の知識を吸収し、夢を持ち続けてほしい。2年後大阪大学のキャンパスで君たちに会えることを楽しみにしている」とメッセージを送りました。

2013年8月26日
大阪府立岸和田高等学校

～この「いのち」を大切に この瞬間を必死に生きて欲しい～

生命の歴史から見ればたった1億分の2にすぎない私たちの人生。だからこそ、「今、この瞬間、みなさんが、私が、ここに生き、そして、ここで出会えた『一期一会』の奇跡を大切に、この「いのち」を大切にしたい」。

大阪府立岸和田高校を訪れた平野俊夫総長が、講演会の冒頭、1年生の生徒360名に向け、命の大切さについてメッセージを送りました。講演では、適塾から繋がる大阪大学の歴史のほか、専門である医学分野の最先端研究の紹介、そして、インターロイキン6の発見に至るまでの困難から得た総長自身の信念である「目の前の山を一つ一つ登りきる」ことの大切さについて熱く語り、講演会の最後にはプロ

アに降り、高校生に「将来の夢」を直接問いかけるなど、生徒たちとの交流を楽しみました。

2013年11月6日
大阪府立四條畷高等学校

GLHS訪問として、平野総長が大阪府立四條畷高校を訪れ、1年生の全生徒360名を対象に講演会を行いました。

「医学と「いのち」」をテーマに、医学の歴史や最先端医療を紹介するとともに、生あるものは必ず変化し、そして死ぬからこそ、「いのち」の大切さや、「今のこの瞬間を必死に生きること」の大切さについて熱く語りました。

講演会は、平野総長が壇上を降り、高校生と直接対話をしながら話を進め、また、発言してもらった生徒には総長直筆サイン入りの「大阪大学NEWS LETTER特集号」をプレゼントするなど、終始楽しい雰囲気の中で進行しました。

2014年7月9日
大阪府立豊中高等学校

2014年7月9日に大阪府立豊中高等学校の学習サポートプログラムが大阪大学会館で

行われ、豊中高校1年生全員(361名)が大阪大学を訪れました。

プログラム冒頭の平野総長講話「医学と「いのち」」では、本学卒業生の手塚治虫氏著作「ブラックジャック」のエピソードを用い、移植医療・再生医療を題材に「いのち」とは何かを考えました。

また、平野総長は自身のインターロイキン6発見に至る話を始め、夢を持ち「目の前の山を登りきる」ことの大切さについて熱く語りました。

質疑応答では高校生ならではの率直な質問もあり、終始和やかな雰囲気でした。引率教員からは「大阪大学に興味を惹かれる、高校生にとって大変わかりやすい内容だったと思う、大変感激した」と本講演会が高校生に大変有意義であったとのコメントがありました。

2015年1月29日
大阪府立茨木高等学校

2015年1月29日に茨木高校の1年生全員(319名)を対象とした平野総長による「医学と「いのち」」の講演を茨木市福祉文化会館・オークシアターで行いました。

平野総長は講演で医学と「いのち」について、ブラックジャック等の分かりやすい例を交えながら、「今を如何に生きるか、この一瞬を大切にしてほしい」と熱くメッセージを送りました。講演後に行われた質疑応答では十数人が質問するなど、生徒は熱いメッセージに心動かされたようでした。総長は最後に「茨木高校のみなさん、大阪大学の入学式でまた会いましょう」と締めくくり、熱を帯びた雰囲気のまま講演を迎えました。

2015年3月7日
私立清教学園高等学校

2015年7月8日
大阪府立豊中高等学校

大阪府立豊中高等学校の学習サポートプログラムが大阪大学会館で行われ、豊中高校の1年生全員が大阪大学を訪れました。

平野俊夫総長から、「医学と「いのち」」の講話を行い、本学卒業生の手塚治虫の「ブラックジャック」のエピソードを用いて、移植医療や再生医療を題材に「いのち」とは何か、そして「生きる」ことの意味を一緒に考えました。

▶2015年4月発行 阪大NOW 144号 掲載 TOPICS より

左から嶋谷氏、平野俊夫総長、東島清理事・副学長



光吹

— MIBUKI —

OSAKA UNIVERSITY ORIGINAL WHISKY
PRODUCED BY SUNTORY



大阪大学オリジナルウイスキー 完成記念イベントを開催



メディアの取材に応じる超域学生の立石和博さん(左・医学系研究科博士後期課程2年)と奥野輔さん(基礎工学研究科博士前期課程1年)



11種の原酒一覧

嶋谷氏



2015年3月19日(木)、大阪大学ウイスキーの完成を記念するイベントが大阪大学中之島センターで開催され、卒業生ら約200人が参加しました。

本学超域学生の企画による大阪大学オリジナルウイスキー「光吹—MIBUKI—」の開発プロジェクトは、産学連携による人材育成の取り組みとして、サントリースピリッツ株式会社のご協力のもと、2014年6月から進められてきました。

この日のイベントでは、ミニレクチャーやトークを通じて、阪大とジャパニーズウイスキーの「レジェンドたち」との深いかかわりや、開発プロジェクトの経過などを紹介しました。

ゲストスピーカーの嶋谷幸雄・元サントリー山崎蒸留所工場長(大阪大学工学部発酵工学科卒)から、「ウイスキーでは阪大が掲げる『調和ある多様性』が実現しています」との話がありました。

学生らによるプロジェクト報告では、「阪大11学部の学生をイメージして厳選された11種の原酒を、学生構成比に応じてブレンドした」との秘話も披露されました。まさに「調和ある多様性の創造」を具現化したものです。

完成したてのウイスキーの試飲では、参加者は香りと味のハーモニーを楽しみ、学生たちが製品に込めた「願い」に思いを馳せました。

「光吹—MIBUKI—」のイベントレポートや詳細をご覧ください。



「光吹—MIBUKI—」スペシャルサイト
<http://www.osaka-u.ac.jp/sp/mibuki>